

We

特集

フェミニズムへの バックラッシュ?!

女と男の家庭科新時代

7

2000

【シンポジウム記録】
「男女共同参画」と
「日の丸」フェミニズムとの
危うい関係

■パネリスト
久場嬉子さん 竹信三恵子さん 堀田碧さん



夏のスタディーツアー

ポーランド・チェコ
平和を創る市民参加の旅
 8/5~13 (7泊9日) 425,000円

アウシュビッツ収容所跡、コルチャック先生記念孤児院、世界遺産のクラコフ、プラハ、テレシン収容所跡などを巡り、平和の意義を学ぶ。
 ☆8名催行

ケニアの子供と女性たち
 ~たくましさとやさしさと~
 8/10~20 (8泊11日) 385,000円

ケニア最大のスラム街「キベラ」を訪問。住民の手によるストリート・チルドレンの為に小学校、AIDSと共に生きる会の活動、NGOによる職業訓練プロジェクトを見学。共生について考察。
 ☆催行決定

ノルウェー・デンマーク
北欧教育福祉視察旅行
 8/18~26 (7泊9日) 546,000円

国民高等学校、小・中学校、高校、平等教育、福祉施設などを見学し、次世代を育てる心を読む。
 ☆催行決定

スウェーデン・デンマーク
障害児教育視察旅行
 8/19~27 (7泊9日) 546,000円

特殊保育園、統合教育小学校、ハビリテーションセンター、グループホーム、補助器具センター、作業所などを訪問し、障害児教育の心を読む。
 ☆8名催行

委託販売：株式会社ホライゾン
 東京都知事登録旅行業第3515号

旅行主催：株式会社道祖神
 運輸大臣登録一般旅行業第757号

☎03-3770-0149

FAX.03-3770-0728

フ・エ・ミ・ツ・ク・ス・の・ほ・ん

■月刊『くらしと教育をつなぐWe』年間10冊(送料込み) 7,500円

■『居場所考◇家族のゆくえ』水田宗子著 1,800円

家族がゆらいでいる今、私たちはどこに向かうのか? 映画や小説を題材に、女性の、そして男性のさまざまな「居場所」を探る、日本のフェミニズム批評の第一人者による珠玉のエッセイ集。

■『Working With Women◇性暴力被害者支援のためのガイドブック』
 フェミニストセラピー研究会編 1,050円

レイプなど性暴力の被害に遭った女性を支援するための方法を詳しく説明した手引書。
 被害者を助けてあげるのではなく自己決定をサポートするための具体的な方法が示されている。

■『セックスするなら眠りたい』ピッコクラブ編 950円

「ママ、僕はどこから生まれてきたの?」子供の問いをきっかけに、20代~30代の子育て中の女性たちが性について本音で語り合おうと始めた回覧ノート。真剣だが明るくさわやかな女性たちの「本音集」。

■『わがままな女は幸せになれる

Let's◇自己表現・自己主張トレーニング』河村ふみ著 1,050円

自分の気持ちを素直に表現し、人と気持ちのよい関係を創っていくにはどうしたらいいのか。誰にでも思いあたる身近な出来事を例に「自己表現トレーニング」をやさしく紹介します。(価格はすべて税込み)

Femix フェミックス 世田谷区池尻3-2-3-703 TEL/FAX 03-3424-3603
 URL: <http://www3.alpha-net.ne.jp/users/femix>

◎フェミックスは出版とフェミニストセラピーによるカウンセリングを事業の両輪としています。
 遠方の方、外出が難しい方のために電話カウンセリングを行っています。☎0990-511320

特集 フェミニズムへの バックラッシュ?!

【シンポジウム記録】

「男女共同参画」と 「日の丸」フェミニズムとの 危うい関係

■パネリスト

久場 嬉子さん 竹信三恵子さん 堀田 碧さん 2

■女と男の家庭科新時代

熊本発・困ったときの一発ネタ 玄米を精米する	榊原 和子 22
かる〜い家庭科相談室 大ちゃんママのお困り相談室	藤原 裕子 24
食の歳時記 第14回 夏はやっぱり冷やしそうめん!	坂本 薫 26
【インタビュー】 児玉 陽子さん「食養」のすすめ	28
新・オホーツクの潮風荒く	江口凡太郎 32

■連載

女が歳をとるとということ 第14回	木村 栄 34
ジェンダーフリー大曼陀羅図鑑 第14回	鳶森 樹 35
書物逍遙/シネマの魔 ① B級アクション映画の効用—ジョン・スタージェス「日本人の勲章」など	武田 秀夫 36
家事神話—女性の貧困のかけにあるもの ② 不機嫌な装置 (中)	竹信三恵子 40
新米議員のジェンダー議事録 ② 「男女共同参画」を後ろ楯に	木村 民子 44
乱読大魔王日記 第14回	冠野 文 46
ひげのおばさん 子育て日記 ④ 批評より褒め言葉を	中畝 常雄 48
過去を振り返らない/先を考えない ③ 見ることと食べること	松本 一郎 50
自己表現トレーニング 番外編 ④ 男は必需品ではない	河村 ふみ 52
終幕 第16回 〈アジアを着る その2〉	水田 宗子 56

●編集者による本の紹介—「専業主婦」で幸福になる方法 船矢 佳子 59

●読者のひろば 61

●ムササビフォーラムへのお誘い 63

●編集後記 64

表紙・イラスト 川口民子

「男女共同参画」と 「日の丸」フェミニズムとの 危うい関係

■パネリスト

久場 嬉子さん

東京学芸大学教育学部教授

竹信三恵子さん

新聞記者

堀田 碧さん

女性学研究者

「男女共同参画」の名のもとに何が進行しているのか、「日の丸」フェミニズムではない、私たちのフェミニズムをつくっていくために、今、何が必要なのか――。

女性の労働・経済問題に詳しい久場嬉子さん、竹信三恵子さん、堀田碧さんから問題提起と提言をいただき、エンパワメントのための知恵を出し合ったシンポジウムの内容を以下にご報告します。(稲邑)

◎堀田碧さんのお話から

フェミニズムと日の丸のドッキング

堀田 この集会を企画したものの一人として、なぜこう

いう場を持ちたかったのかをお話ししたいと思います。

昨年の六月に「男女共同参画社会基本法」(以下、基本法)が成立した直後のあるシンポジウムの場で、私はあるフェミニストのシンポジストが「基本法ができて、これからはジェンダーフリーの社会がきます」と言われたのを聞いて引つかかるものを感じたんですね。彼女が言いたかったのは、「これからはフェミニズムが主張してきたことが社会の主流になつていくのだ」ということだと思ふのですが、審議会の中にいた経団連や政治家の思惑を考えると、基本法の「これからはジェンダーフリーだ」という呼びかけの中には、フェミニズムの主張だけではなく、「これからは男も女もなく能力主義でバリバリ働い

てもらいましよう」とか、「これからは女だとか差別がどうだとかいう時代ではない」というアンチフェミニズム的な考え方がいっしょになっている、という気がしたのです。

で、その後、前後して日の丸・君が代法案ができ、去年の秋頃から、男女共同参画関連の集会で、さりげなくかつ堂々と日の丸が掲げられるようになりました。それは一連の流れの中でたまたま出てきた偶然の一致、あるいは総理府主催の集会だから日の丸が出てくるので、そのことはそんなに問題にしなくてもいいんじゃないか、フェミニズムの中味を実質的に取っ払いはいいいんじゃないかというふうに感じられた方もいらつしやったのではないかと思います。

でも、私はそれだけでは片づかないだろうと思いましたが、それはなぜかというところ、三つの理由があります。

一つには、女性をめぐる政策というものが、今歴史的な転換期を迎えているということ。女性を私的領域に閉じこめ、公的領域から排除するという基本政策から、公的領域への進出を促す政策に、今舵が切られた、これからはそれが政策の基本になってくるだろうということなんでしょうね。

その背景としては、大きく見ると、進行するグローバル

リゼーションとそのもとの国家的危機、あるいは競争力の喪失に対する危機感があります。そこから、女性の力を活用あるいは利用して危機を乗り切ろうという大きな政策転換があり、その象徴としての「フェミニズムと日の丸のドッキング」がある。ですから、「たまたま日の丸があるけれど、フェミニズムで取れるものがあるならばそれでいいんじゃないの？」ではすまされない、これは危ないことになるのではないかと思つたのです。

この間、某知事、某首相の発言に見られるように、次々と国家主義的、排外主義的な発言が出てきています。これらは封建的で前時代的な反動のように見えるし、実際彼らは封建オヤジでもあるのですが、問題は、新国家主義の動きが、そのような古くさいものだけではなく、近代資本主義を進めていく新保守主義の動きと共に進行しているということなのです。世界がどんどんグローバル化していく中で、それに対応する新しいかたちでの国家主義が、規制緩和とか自己責任だとかいった新保守主義の掛け声と一緒に出てくるという過程の中で、日の丸が出てきている。

さらにこうした二つの動きは、「日本型ポストモダン状況」とでもいうような、日の丸・君が代を問題にするこ

と自体へのアレルギーとか、政治そのものを嫌がる風潮

と結びついています。

この三つの要素の結びつきが鮮明に出ているのを感じたのは、天皇即位十周年のイベントをテレビを見たときのことです。一角には遺族会、もう一角には政府経済界。そしてもう一角にいたのが天皇のための曲をつくったロックグループのXジャパンのよしきとファンの女の子たちという構図です。

男女共同参画をめぐる三つの要素

堀田 男女共同参画の中身にも、同様に、この三つの要素が出ています。男女平等法案と言えはいいのを、苦し紛れに妥協の産物として言い換えをした。その時に差別とか平等の要素が弱められて「男も女も一緒に仲良くやりましょう」というニュアンスで出てきて、三つの要素が結びついたかたちで共同参画が進行しています。

つまり、昔ながらの「男は男の分を守り女は女の分を守り一緒にやっつていこう」という考え方と新保守主義的な「これからは男も女も関係ない能力主義で」という考え方、そしてポストモダンの嫌フェミ、反フェミや「ジェンダーレス」、これは洋服をユニセックスにして男女の区別をなくすというような感覚ですが、それらが共同参画の中にもあるということ、これはとても危うい

のではないか。私たちが願ってきた性差別をなくすということがそういう違った共同参画にすり替えられようとしていることの象徴が、集会に掲げられた日の丸であり、それを問題にする声がない限り、あたかもフェミニズムの主張が取り入れられたかのようなポーズを取りながら進んでいって、気がついてみると男も女も国家のため、企業のために滅私奉公で働けというところに流されるんじゃないか。

けれども、「それじゃあ、共同参画なんか胡散臭いから、そんなのには関係なく、私たちだけでやればいいんじゃないの」というふうにはすまないところに私たちの難しさがあります。例えば能力主義というときに、能力を持つていても機会を与えられずにきた女性にとつて、プラスの面はあるし、それは活用しなければならぬ。ただ、それを「国家や企業のために能力を発揮しろ」というふうに使われるのは困る。その微妙な違いをどうはつきりさせていくのか問われています。今日はそのあたりを話し合っていきたいと思っています。

◎久場嬉子さんのお話から

男女共同参画を取りまく危うい流れ

久場 新保守主義やグローバル化のバリエーションについてお話しするつもりだったのですが、レジュメをつくるうちに、改めて均等法の不幸な出発の問題や「日本型メインストリーム化」の落とし穴の問題を痛感するようになったので、そのことにも少し触れたいと思います。

総理府発行の『えがりて』という広報誌の誌面で、さまざまな集会で掲げられた日の丸の写真を見てショックを受けたのですが、それは日の丸そのものへのショックだけではないんですね。基本法を取り巻いている、今の日本の状況を非常に象徴的に表しているのではないかと思っただけです。

基本法というのは、ご存知のように、これから各地方自治体で条例化が図られる、国の基本法として大きな影響を持つ法律として成立したわけです。これは男女平等政策から見ても、非常にポジティブな動きであることには間違いない。ところが、この基本法をめぐる環境は、非常に問題の多い、ネガティブな面をも含んでいます。そういうむずかしい状況に私たちは置かれています。

例えば、六月にニューヨークで開かれる「北京+5」の世界女性会議に対して、基本法で、男女共同参画推進の最高責任者に位置づけられている青木官房長官は、非常に「内向き」の関心しかもっていない。つまり、彼の

「男女共同参画」とは、少子・高齢社会を乗り切る「活力ある日本社会」をつくるために、女性の力が必要だということなんですね。

新保守主義・新自由主義・グローバル化

久場 そもそも、男女共同参画を取りまく危うい流れとは何か。

一つは経済の動きですが、新保守主義やグローバル化と言われる時代潮流の問題です。

新保守主義というのは、七〇年代八〇年代に欧米で出てきたレーガン、サッチャー（七九年に登場）、日本では中曽根路線のことで、彼らにとつて、福祉国家は大きな政府であり、経済の発展の役に立たない。小さな政府への転換が必要だと主張しました。この考え方は、つまり「福祉国家体制以前の自由主義経済に戻ろう、福祉国家のように政府が経済の領域に介入するのでなく、市場の動きに全てゆだねよう」という主張なので、新自由主義とも言われています。

ですから、「革新」の主張する福祉国家体制を批判するということ意味で新保守主義と呼ばれ、もとの自由主義経済に戻れという主張によつて新自由主義と呼ばれるわけで、同じものなのです。これが七〇年代八〇年代の動きです

が、これがまたグローバル化の動きと結びついていきます。グローバル化というのは、資本主義がさまざまな規制を超え、国境を超えて自由に動き回ることであり、市場主義の最先端をいくものです。ですから新保守主義・新自由主義・グローバリゼーションというのは重なり合って進んでいる時代潮流なわけです。

こういった動きは日本だけではなく、むしろ日本は一步遅れてその中に入り、今そのまっただ中にあり、それがメインストリーム、「主流化の路線」と言われるものなのです。

新国家主義

久場 もう一つ、以上の経済の動きと共に、政治の動きとして、台頭する国家主義の問題があります。日本には伝統的な国家主義と新国家主義というものが、それだけではなく、今回の「神の国」発言ではつとしたのですが、戦前からの超国家主義も未だに健在です。衆参両議員の二二九名の人たちが「神道政治連盟」に入っていて、三〇年も前から活動している。しかも、これら三つの国家主義は、これから一層結びつきを強める可能性を秘めているなど、依存関係にあるのです。

伝統的な国家主義というのは、新保守主義、新自由主義、

グローバル化とびつたりします。福祉国家はいけなけれど、国家は大事だ。伝統的な国民経済にのつかって国家の力を強めながらグローバリゼーションの中に入っているということ、伝統的な国家主義とグローバリゼーションを推進する動きとはつながります。サッチャーは典型的な新保守主義者ですが、伝統的な国家主義者でもありません。EUに入るのも嫌がり、大英帝国を守れと言っている、近代国家を支えるのは伝統的家族、性別分業の家族であるとして「ビクトリア朝の美德」を主張しました。それから見てもわかるように、「伝統的な国家主義と新保守主義はつながるのです」。

そういう動きとちよつと位相を変えながら、今日日本では新たに新国家主義が出てきています。これは規制緩和に対してアレルギーを持った人たちで、「規制緩和はさまざまな矛盾をつくり出し、日本の伝統的な文化や歴史をだめにしてしまうアメリカ化」だと主張しています。近代主義である伝統的な国家主義とはちよつと姿を変えながら、行きすぎた市場主義に対して、日本の歴史や共同体の重要性を主張しています。

ともあれ、新国家主義が新保守主義と徹底的に対立するのかというと、そうでもないという複雑なところがある。規制緩和が悪いとして徹底的にそれを押し通すかと

いうと、必ずしもそうではないし、「共同体は大事です」とか、「日本独自の歴史は大変重要です」とか言つて、規制緩和に不満を持っている人たちの精神的いらだちを癒す役割しか果たさない。実際に、グローバリゼーションの動きに対してどのような対抗軸を出すのかということについては何も言わない。これもまた、新保守主義と親和的な関係にあります。

福祉国家であつたことのない日本

久場 このような時代潮流を、ジェンダー視点でどう読み込むか。あるいはフェミニズムと国家の関係はどうあるべきか。

均等法が成立し、雇用される女性が増えている中で、当然、今まで女性が担ってきた家事・育児・介護などの労働力の再生産に関するさまざまな施策、社会保障サービスが、国の政策として全面的に取り上げられてもいはずです。それが福祉国家であるわけですが、大変皮肉なことに、均等法ができるとき日本の産業政策は財政再建の方に向いていて、支出を抑えることが経済政策の大前提だった。では改正均等法のときはどうかというところ、まさに規制緩和のど真ん中で保護が撤廃されました。私も、女性だけの保護は違うと思つていたので、保護撤廃

に賛成しました。それでは、その後、男女共通の保護が行われるかというところも手つかずのまま。むしろ「雇用不安」がおおられ、男女共に雇用のリストラ（規制緩和）が進んできました。

言つてみれば、日本はずっとバックラッシュを続けてきた。新しい男女平等の社会福祉の仕組みをつくらうと本気になったことは一度もない。欧米の場合は、バックラッシュと言つても、戦後の二五年間で福祉国家をつくり、また雇用の場へ女性が大量して進出するという過程があつた。その後、新保守主義でバックラッシュに遭うので、少なくとも、それをつくってきた歴史なり成果があるわけです。日本はそれがないまま、ズブズブのまま、国家や企業の側から、必要に応じて、つまりつまみ食いの女性的社会的参画が進められているのです。

◎竹信さんのお話から

バックラッシュ——ジェンダー記事の減少

竹信 堀田さんが言われた三つのパターンのナショナルリズムの分類は、私もびつたしだと思つし、久場さんからはその背景にある経済的な動きについて詳細なご説明があり、これも大変分かりやすかつたと思ひます。

そこで、今まで言われてきたようなことが、具体的にどのようなかたちで出てきているかということをお話ししたいと思います。

メディアとか情報レベルを誰が支配し、それがどのように流されているかというのは重要なことなのですが、メディアは水や空気のように思われ、ことが起きると自然に流れてくるのだと思ひ込まれているふしがあります。あれは実は、メディアの中で周到に用意され、あるいは、かなりいろんな確執の中、押し戻したり押し返されたりという中で出てきているのであって、メディアの中で女性力が負けると女性関連の情報は出なくなるのです。なんとかいろんなものを動員して力関係が拮抗しているくらいの時は出てくるというのが、新聞における女性報道の実情です。

「ジェンダーについてイベントを起こせば報道されるとか、メディアは中立公正で起きたことをみんな報道してくれるかと思いませんか？」と聞くと、最近の方はそんなにナイーブではないから「思いません」と言うのだけど、実際新聞を読んだときは、そう思ってた読んでいるのではないのでしょうか。

少し前まで大手新聞の家庭面のデスクを二年間やっていていましたが、勉強したいことがあったので、今は同

じ会社のシンクタンク部門で論文を書いています。デスクを降りてからの状況ですが、紙面を見る限り、ジェンダー報道は非常に減っているとの印象があります。出るのはせいぜい法案化したときぐらいですが、そのときは「法案化されたのですがにこれはきつと大きいニュースなんだろうな」と思ってた大きな扱いになるようです。いろんな法案が不十分なかたちではあるが通っています。

意思決定の場に女性がこれほど少ない社会で、「神の国」発言をする首相を出すような政府を相手にして、よくまあ、ストーリー法が通り基本法が通り、いろんなものが通ったと思っています。これは女性たちがすごく頑張ったからだと思います。いろんな手を使い、必死に通してきたんです。

日本の国会議員の女性の比率は衆議院で5%、そんな状況で何であんな法案が通るのか、と思うでしょう。クオータ制がないから、女はどれも非常に少ない。メディアも新聞社の女性記者はまだ一割。しかもデスク以上は殆どいません。その割にはものすごくよくやっただと、この会場にいる女の人たちの肩を抱きしめたい気分であるのですが、一体そのギャップは何なんだということですが、女性たちがいろんな仕掛けをしたことは事実です。そうやって情報を膨らませて少ないもの多く見せるというこ

とを必死でやってきた成果です。

でも最近はまだ揺れが来ていて、ジェンダー関連の記事が非常に減っている感じがあります。その原因としては三つのレベルが考えられます。

一つは、九四年からほぼ四年間続いた「自社さ」の連立政権は私たちが思っている以上に大きい影響があったということ。安保政策を転換しちやったりして評判が悪い面も少なからずあった連立政権でしたが、社民とかさきがけとかがいて、その人達は比較的新保守主義と違う立場に立っていたわけですよ。福祉的なものをもっとやってもいいんじゃないかと思っている人たちで、だから政権中枢に女性たちのロビーイングの受け皿があったわけです。でも、政権が変わった今、それと同じことをやっていてもしょうがないんじゃないでしょうか。まあ、基本法にしても、審議会の答申の段階ではもっとはつきりしていたし、まあ、いい線を行っていた。それがあんなくじやくじやくの法律になったのは、その間に政権交代があり、政府のムードが変わっちゃっているんです。そのことがあまり意識されていない。これが一つです。

それから二つ目は、さっきの新保守主義とか新国家主義の話の中にありますが、とにかく「オヤジバックラッシュ」が凄まじい。男性の学者の中には、ちよつと専

業主婦のことを紙面に書くと、鬼の首を取ったようにものすごい勢いで「専業主婦を批判するな」と抗議してくる人もいる。社長のところまで手紙を出してくる。それから女性の側からも、「専業主婦で自分はややんとやってきたのに、最近、急に専業主婦がバカにされたような記事が増えている」という抗議が来る。そうすると、女性が働くためにはどうしたらいいかという記事が出しくなくなっています。そういうかたちで「オヤジ・専業主婦」ラインの「バックラッシュねじ」が効いてきている。読者から言ってくると、会社の内部でも同じようなライフスタイルや世界観で感応してしまう人がいるので、女性記事がとてもしきにくい。

女性記者もそうです。新聞社の中で喜ばれないテーマで、しかも自分が魅力を感じないテーマを必死になつてやるよりも、認めてもらえる仕事をやりたいと思うのは当たり前なのかもしれません。私が会社に入った20年くらい前は、女は家庭面へ行けと言われることが多かったのですが、今は、頑張れば男と同じところへ行つて、例えば「女性初の部長」になれる可能性がないわけではない。だったらそつち狙う方がずつと効率がいいと思うのは分かる。人間の生きていく面白味よりは人に認められたいことを選ぶという生き方もありますから、そういう

う人にとつては自然な選択なのです。

その三つの要素がジェンダー記事の登場が非常に減ってきている背景にある。これがメディアの中でのバックラッシュの実態だと思えます。ブック・ジャーナリズムの世界でも似たようなことが起きているのではないかと思えます。久場さんがおっしゃるように、もともとバックラッシュ続きだというのは全くのその通りだけれども、北京会議以降の、ちよつとでもあつた高揚期へのバックラッシュが、今また、あつとつという間に起きているということではないでしょうか。

バックラッシュにあつた人をサポートする

竹信 問題なのは、あまりにも日本社会ではバックラッシュが続きすぎていたためか、皆、今起こっていることを構造的なバックラッシュと思っていないことです。「相手の言うことをおとなしく聞いて、賢く立ち回ればそういうものから逃れられたはずなのに、あの人がばかかな対応をしたためにバックラッシュにあつたんだ」「やりかたがまずかつたんだ」と、こういう総括が結構多い。だからバックラッシュにあつた人は孤立してしまふ。

しかも、女性団体と言われているものの中でも、そういう見方が時として見られるので、まじめにやってみて

い目にあつた人が、フェミニストからサポートをもらえないでフェミニズムへの信頼を失うという、そういう辛い事態も、時々聞きます。

バックラッシュにあつたこと自体はむしろ意味のあることをしたために起きたのであつて、それはむしろ誇りにすべきことで、対応が悪いとかそういう問題ではない。それなのに、「やられたほうが悪い」と遠巻きにして、何もしない。そのときにフェミニストからのサポートがあれば、「こんな目にあつて悔しい、だから今のシステムはおかしい」とさらに出ていく力になるのに、そのサポートのノウハウが確立されていないので、当事者が孤立して、ぼしやつてフェミニズム嫌いになつてしまふ。それは非常に問題ではないかと前から思っています。

それで、構造的な分析だけでなくテクニカルな話をもう少しした方がいいのではというのが私の問題意識です。

◎ 質疑応答から

中味が変わるような作戦を

質問 今の社会は変わったようであまり変わっていない。今の若い人たちが結婚するしかないと、私たちと同じような道を選んでしまうのが残念です。フェミニズムがと

ぎれないように、彼女たちに語っていけるようなものが欲しいと思うのですが。

竹信 若い人が「何も変わってないじゃないか」と言うのは、割にいい線をつけていると思います。テキのテクニクは上手で、変わらないように変える。一見変わったように見えるのですが、衣装だけ変えて中身はさほど変わらないので、私たちのエネルギーが衣装を変えるところだけに吸い取られて疲れてしまうんです。

だから、中身が変わるような作戦をそろそろ考えないと。私たちには衣装を変えるくらい力があるのは分かった、というのをとりあえずの今の確認点にしてもいい。でも、それが今のところ精一杯なんです。「自社さ」連立のときの効果を意識化していないこともあって、選挙で勝負、というフェミニニストはまだ少ないし、栗田を意識的につくり出すという動きもない。栗田というフェミニニストの中には嫌な顔する人いるけど、圧力団体がなくちゃ、今の政治家なんて動かないから、それくらいやらないとだめなんだと思う。実態が変わるような戦略を、ことを始める前につくらないと、いくら動いても何も取れず疲れてしまうんです。しかも、日本の女の人はまじめだから願いをこめて「お百度詣り」みたいなことをする。「千人針」とか、あの発想ですよね。

消耗する前に、実際に変わる何かを考えてもつとずるくやるうぜ、ということを考えませんか？ というのが私の言いたいことです。

リベラル・フェミニズムの陥弄

久場 「がんばり型フェミニズム」の話をして、今のことに多少触れさせていたきたいと思います。私が新リベラリズム（新自由主義）のことを申しましたときに、皆さんたちのお顔を見ていると、「リベラリズムいいじゃない」と思っている感じがしたんですね。確かに、リベラリズムは女性にとっていい面を持っているんです。今までの規制の多くは男性の利害を守るというものだったので、それを緩和するのは大賛成だし、規制緩和がすべて悪いとは思いません。その規制緩和を主張するリベラリズムもいいじゃないの、というのと同じ理屈になります。

日本の「がんばり型フェミニズム」はまさにリベラル・フェミニズムです。リベラリズムは自立した個人、自己責任を強調して、女性であれ、男性であれ能力に依じて働ける人が働けるよう、規制緩和を主張している。そういう意味で言えば、ジェンダー・ニュートラルですから、フェミニズムの要求とあうわけです。

ただ、そのときに自助努力・自己責任ということが非常に強調される。それは一見もつともらしく聞こえるのですが、一方では、育児・家事など、女性が歴史的に負ってきた再生産の部分を、社会的に、また男女で分かち合う仕組みができない限り、女性の個人個人が自己責任を貫徹できない構造ができあがっています。これはフェミニズムの根底のところに関わる問題です。それが見落とされたまま、「がんばりましょう」「自立しなくてはダメよ」「夫の収入あてにしたらダメよ」とだけ主張するのは、より辛いところに女性を追いやることになります。

名古屋の代表的なフェミニストの一人が、新国家主義の経済審議会が出した答申案について、「これはまさに私たちが言っていることとびつたりのことだ。経済界もよくぞここまで変わったものだ」と書いています。「ジェンダー・ニュートラルで個人の能力にあつた非常に透明な市場をつくり出して」というようなことを経済審議会の答申が言っているのですが、「これこそフェミニズムの主張じゃないか」と彼女が書いているのを読んで、私はびっくりしました。

現実には、男女の賃金格差はどんどん広がっています。実際に自己責任で女性も堂々と働けるようになっていくのだろうか。もちろんほんの一握りですが、なっている

人もいます、だから全部ダメではない。変えられるところは変えています。だけど、基本的に変えていない部分があつて、それはその人たちが自己責任が取れない人だから変わっていないのではなくて、構造的に変えられないようになっていっている部分があるのです。それをリベラリズムは見えないようにする。そこが問題なのであつて、「がんばり型フェミニズム」という日本のフェミニズムの主流の考え方の中に落とし穴があるということを明らかにする必要があります。衣装を変えても変わらないのはどこなのか、それはすごく大きな問題です。

なぜ、フェミニズムは、

再生産の問題を正面から提起できないのか

久場 女性が辛くなっていることの理由がもう一つあります。先日森首相が「社会病理」とか言っていました、少年犯罪の問題なども女性にとつて他人事でないテーマです。何か起きると「だから女が性別役割の見直しなど言っちゃいかんのだ」というふうになんか仕掛けられてくるのですが、「社会病理」がなぜこれほど深刻化しているかというところ、変えるべきところを変えていないからその矛盾が出てきているんですね。

フェミニストは、日本にウルトラ・伝統的・新国家主

義の勢力が強く、「女の役割・家族の価値」だとか言ってくるのは目に見えて分かっているから、そういうまっとうに理解してもらえないだろう状況のもとでは、再生産の問題を言いたくても言わない、言えない。一方、そういう状況の中で、市場主義が進み、新自由主義が規制緩和を主張し、社会的規制を準備しないまま無制限に男性も女性も市場に取り込んでいく。この社会状況では、仕事の間だけでなく、地域や家庭など再生産の場で、いろいろな「ゆがみ」や矛盾が出てくるのは当然です。そうすると、「それ見たことか」と、今度は超国家主義が国家だとか国旗だとか、さらに家の価値だとか家族の価値だとか言い出す。このように、日本ではフェミニズムは再生産の問題を、ポジティブに語れないという状況があります。

日本には、戦後半世紀以上たった現在でも、戦前の体制、超国家主義の土台が一定程度維持されています。今、あたかもそれに対抗するようなかたちをとった新保守主義が出てきている。フェミニズムも、根強い超国家主義に対抗するものとして、新自由主義に期待を持っている。新自由主義が超国家主義を壊してくれるのではないか。むしろ、市場原理主義でないと壊せないのではないか、という幻想を持ってしまふ。

しかし、私は、新自由主義と超国家主義の、「不幸な馴れあい」を見落としてはならないと思います。つまり、極端な市場主義は、自己正当化のためにも、超国家主義を利用できるのですね。

「税金を払っていない」専業主婦

質問 年金の問題ですが、いわゆる専業主婦、第三号被保険者で所得税も介護保険も払っていない人が千二百万人もいることをどう考えればいいのでしょうか。税制の控除を見直すという民主党の管直人議員の提案に、宮沢蔵相が所得税を払っていない人がもし払うとしたら二兆円の増収になるから大賛成だと言いました。税源不足がはつきりしているので専業主婦が狙われています。今、ホームヘルパー二級の講習を受けていますが、受講者は専業主婦の人ほとんどで講習は都税で実施されているのに、「働きたくない、ボランティアをする」というのです。働いて税金を払ったり、介護保険料を払ったらどうかと思うのですが、すごい貧乏な私が、何で奥様方の介護保険料まで払わなければならないのか……そのへんを考える必要があるのではないかと思います。

久場 八〇年代の中頃、均等法ができたちょうどその時に、専業主婦と雇用されている女性の数が逆転しました。

ということは、家の外で働く女性が増えたわけで、家庭内の再生産機能を男女ないしは社会がどう分担するのかわからないことを当然考えなければならなかったにも関わらず、特別扶養控除が設定されました。再生産の部分は地域で相互扶助で見よということです。女性のある部分は外に出し、ある部分は家庭に入れるための政策として、特別扶養控除が設定されました。その基本路線は今も変わっていません。専業主婦と言われる層も、実際はかなりの部分がパートなどをしています。ただ、その中身は、自立できない収入しか得られないような方たちで家庭の中に閉じこめられている。そのことを変えること、それが一番の大前提です。

堀田 今のお二人の意見を踏まえた上で、私がいつも一言言いたくなってしまうことがあります。さきほど言いましたが、今、専業主婦の解体への舵が切られて、これからはほんの一握りの高級専業主婦を除いては働く主婦になつていくのではないかと思っています。

今までは、政府の政策自体が、基本的にオヤジと専業主婦で一つとかたちでやってきたのですが、それではやっていけないということで政策転換がなされました。欧米を見ても、主婦問題は八〇年代頃からフェミニズムの中で論争がなくなった。それは問題が解決されたの

ではなく、専業主婦自体が層としては解体されてしまったということです。

ところが日本では、経済的にも政治的にも中枢的なところへの進出の道は依然として困難で、しかも女性の家庭責任はそのままにして、みえみえの劣悪条件、あるいは介護労働みたいなところに受け入れますよといった方たちで専業主婦解体の手がつけられた。そういう中で、専業主婦を敵にすることはフェミニズムにとつて得策でないばかりか有効ではないのではないかと。もちろん、お二人はそういう意図でおっしゃったわけではないと思いますが、非常にいびつで問題のある政策をつくつて、「あなたたちに利益をあげますよ」と、その人たちを乗せたその政府なり政策なりが非難されるべきであり、よく言いがちな「税金を払っていない専業主婦」という言い方は、多分いろいろな抑圧や怒りを感じているはずの専業主婦をフェミニズムから遠ざけてしまうのではないかというのが私の考えです。

女性の自立のために何が出来るか

竹信 私はその中間なんです。つまりね、「専業主婦はなくなっている、お金持ちの主婦とそうでない主婦は全く違う存在である」と私の本に書きましたが、ただ、日

本の場合、今のままの流れで行くとリッチな専業主婦はどんどん減り、残る主婦は有償ボランティアになるのではないかと嫌な予感がしているんですね。フルタイムの女性になるわけではなく、パートですらなく、「有償ボランティア」としてどんどん増やすのではないかと。

今、私はワークシェアリングを研究テーマにしているのですが、特に自治体のパートで、正職員以外の細切れの仕事、特に早朝や深夜にパートを当てていることが多い。採用する人材としてどういう人が良いかという内部文書があるのを見つけたのですが、子育てが終わり、夫の扶養に入っている人を狙えと書いてある。安くても働いてくれるし、既婚だからこそそのノウハウを持つている。夫が基本的に「養つて」いてくれるのでうるさいこと言わない、労働運動しない、とこういうことなんです。

ワーカーでなく有償ボランティア。これが一番あり得るパターンで、私たちがしなければならぬのは、多分、宮沢さんがおっしゃっているような税源確保のためにやるのではなく、「女性の経済的自立のために何ができるのか」という立て方から始めていくことではないでしょうか。そうすれば、きつというんな解決策が見つかります。

主婦をどうするのか、まず基本に返ることが重要ですが、そのときの出発点は「女性の経済的自立をどうやつ

ていったらうまくいくのか」。だから財源を節約する話に乗っかってもいいですが、そうやって浮かせた財源で、女のための職業訓練など、女性が自分で食べていける政策づくりの要求などをしていかないとだめなんだろうなという気がしています。

日本型メインストリーム化の落とし穴

質問 基本法ができて、賃金格差が厳然としてあり、それに対して何も手だてがない。女性が一人で生きていけるような賃金が欲しいと思います。

久場 私は基本法ができたということは、女性政策がメインストリーム化したことだということを申し上げたのですが、メインストリーム化の本来の意味は、政府や社会の諸政策の中に女性政策やジェンダー政策を「徹底的」に入れ込むということなんです。ただ、それをすることが、日本で、今、本当に可能なのだろうか、あるいはむしろその作業が、目的をゆがめられたかたちで押し進められないかと危惧しています。

メインストリーム化して、表舞台にそれを出さねばならないのですが、表舞台は既存のがんじがらめの男性中心、男性優先の政策体系ですよ。扶養者としての男性の稼ぎ手を少しでも維持したいというのが雇用政策の基

本として浸透しています。本来は、そういう政策の中に基本法の中身を入れ込んで、政策や制度を変えるべきなのですが、そういうことが、今の政治状況をそのままにして本当に可能なのか。

むしろ、逆に、メイנסトリーム化することで「男女平等なんてもうマイナーな問題ですよ」、「活力ある日本社会の形成こそが優先課題ですよ」と言って、そのために女性政策を従属させる。それが日本型メイנסトリーム化であり、それが日の丸に象徴されて出てきつつあるのではないのでしょうか。

もしそうだとすれば、囲い込まれる可能性があるんですね。女性問題の解決のためにはより大きな経済政策、労働政策化に取り組んでいかなければならないし、またその具体化が図られなければならない。しかしその過程で、女性政策がマイナーな政策にされてしまうという大変な瀬戸際にあるのだと思います。

竹信 今、久場さんが心配されていることは、女性「皇民化」政策ということではないかと思つたのですが、周辺のな人を国策にもつていくためにある程度持ち上げ、自分たちがほめたいところだけをほめる。周辺のな人たちは、差別があるからほめられたいと頑張るし、認められたいと思う、そういう気持ちを利用して周辺のなもの

の力を最大限引きだすかたちでやるということはありませんか。

久場 私が言いたかったことは、もう一つ、こういうことです。例えば、基本法にも出ている重要な政策なのですが、無償労働をどう測定するかという課題があつて、総務庁の労働力統計課が社会生活基本調査を見直して、これをどう測定するかという研究会を設けています。

そこに参加していて強く思うのですが、統計というのは、さまざまな政策の基盤になるのですごく大事な問題に意識を持った人が入らなかつた場合どうなるかという危機感を感じています。基本法のおかげで、そういうことに着手しなければいけないという動きが政府の中で出てきています。EUの調査と比較するなどアンペイドワークを捉えようとするもので、その事業そのものは意味があるのですが、進めていく過程で女性のパワーが足りなかつた場合、われわれの望むものではない結果が出てくる可能性はいくらもあるのです。基本法の実施は、いわばいたるところでそういう問題をはらんでいるのです。しかも、日本の政治・経済的メイנסトリームは、先にみたように、新保守主義であり、新自由主義であり、しかもその背後には超国家主義が台頭の機をうかがつて

いる。ジェンダー政策の「メインストリーム化」には、こういう問題が絡んでいることを見ておく必要があると思います。

◎最後に

私たちは同じじゃないということとを認めること

堀田 「では、これからどうしていったらいいのだろうか」というところに話を移すと、一つには、今問題になっているのは、女性の分断・選別が進みながら動員が進んでいくときに、どうやっていくのかということだと思えます。

その鍵は、「私たちは同じじゃない」ことを認めること。同じである必要はもちろんないし、たとえ必要があっても同じじゃないから、違っているから連帯しようと思わないのだし、私はいろんな要素を持っていて、その私の中の何分の一かでは、この人たちと一緒にやっていきましよう、違う面では違うことをやっていきましよう、という柔軟で絶えず変化していくような関係性の中で進めていく方がいいんです。

これを言葉で言えば「多様性を尊重する」となるのですが、言うは易しです。日本社会は同一性を要求するプレッシャーが強い社会であり、それがまた心地よさの元

にもなっていて、「貴女と私はどこまでも同じ」を要求することになる。フェミニズムの運動の中にもそれが強くあつて、ちよつとでも違う人を排除してしまう。それだけでなくも小さな力なのに、もつたいたいなし、一割でも一緒にできればいい。柔軟で動きのある連帯のかたちを渦のようにつくつていきたいと思っています。

「私」というものはいろんな面を持っており、例えば、主婦という言葉、働く女性という言葉で括られることを超えたところにいつも私はいるし、そういうところから出発していききたい。今、フェミニズムは変わらなければならぬと思います。

メインストリーム化に伴う困難は、社会が直面する問題の全部に対抗することを求められるがゆえの困難ですが、逆に言うと、それはチャンスであり、ジェンダーの問題はここにもある、あそこにもあるというふうにいるところ、目をつけて主張していけば、まだ変わる余地がたくさんあるということなんです。

私はそれを楽観的にやっていきたい。大きなフェミニズムだけの要求でなく、もつと小さなことで散つたり集まつたりしながら、それぞれの場でやっていきたい。同質のものが集まるのではなく、他の観点から社会を変えたいと思っている人、自分が受けている差別から女性が

受けている差別を類推して共感していくことができる人たちともつながりをつくり、重なる部分は重なり合いながら、大きな柔軟なネットワークをどんどん広げながらやっていけば、そんなに捨てたものじゃないというような気がしています。

三つの具体的課題

久場 まもなく総選挙ですが、なるべく多くの女性を政策決定の場に送り込む必要があるということは全くその通りなのですが、現時点では、もう一つのことも見落とせません。例えば、保守党の党首である扇千景氏は、神道政治連盟に熱心でかつ参議院の会場に日の丸をと声を大にして叫びまくっている人です。また、女性にとつて不可欠な社会的規制は最小限にと、大々的な規制緩和を主張しています。同じ女性党首でも、労働権とともに社会的保護や規制の必要を政策課題に掲げている社民党の土井たか子氏とは大きく違っています。女性であるとともに、どういう政策を進めようとしているかをしっかりと見極めるということが同時に言われないと危ういと思っ
ています。

二点目。女性の間、また男性と女性の間で「分断と選別と動員」が進む中で、専業主婦、働いている女性、男

性を問わず連帯できる課題は、雇用の創出という課題です。介護保険の展開でかなりの数のケアワーカーが必要なので、そこに、諸権利の確立した、税金の払える短時間及びフルタイムの労働者をつくれるはずであり、それは具体化できる早急の課題です。もしそれに失敗すると、私は決していちがいに外国人労働者を排除するつもりはないのですが、安価なアジアの女性の労働力を入れようとする動きが早まります。

三番目は、メインスตรีム化をめぐるの困難ばかり強調しましたが、メインスตรีム化は必要だと思っ
ています。なぜかという、男性もこの問題に巻き込む、あるいは一緒にやる以外に解決はできないと考えるからです。男性も、猛烈なりストラの中で、新しい働き方を求めざるをえない。その人たちの悩みと一緒にあって、生産と再生産の両方の場で男女の働き方を変える、これも今の課題です。

対抗するための道具づくりを

竹信 「中流フェミニズムかどうか」という問いを発したのは、これまでのフェミニズムの中には、やや逆説的な言い方ではありますが、ものごとを変えたくないためにフェミニズムをやっているのかな、という人が結構いたので

はないかと思うからです。夫の扶養に入ることと安定が得られるような社会であれば、こうした仕組みの中で安定を得ている女性が、「変えたくない」と思っても、それはしようがない。それでも自分が何か社会のためになつていたいと思うために、思想としてフェミニズムを受け入れて、それになにか知的に上昇したいという気持ちになつてみたい、ということではないでしょうか。ただし、これはもう世の中がそんなこと言つていられる状況でなくなつてきているので、こうした層の人々は分解しちゃつていて、そのうちなくなるだろうと実は思っています。

ただ、自分でいろいろ考えていくならば、「本当に自分はこのことを変えたいのか」「本当は何をしたいのか」「変えるんだつたら何が必要なのか」といったことを、きちんと一から考え直して、情性でこうすべきだとか、これが正しいからこれをするとか、人に言われたからとか、みんながそう言うからするということは、もういつペンチャラにしましょうよ。そのほうが楽しく爽りのあることができる。まずそういうところから出発したほうがいいということが一つ。

それから、「自分がほんとうは何を欲しているか」ということを自問し、その上で、自分の感じていることを相手に伝えるという訓練が必要です。そうするには、まず、

自分の感じていることを発見しなければならないのです
が。

やりたいことが分かれば方針が立つのですが、これが
実はむずかしい。それから何々をしなくてはいけないと
か、何々が正しい道だとかというのは爽りが少ないので、
「自分がこれをしたからする」という路線がいい。

次に、他の人のニーズをすく上げる。最近聞いた話
でわりとおもしろかったのは、「NPOマーケティング」
といつて、商品を売るためのマーケティングではなく、
人々が運動の中で何を期待してるか、どういうことを解
決して欲しいと思つているかを突き止めていく、ニーズ
をすく上げるためのマーケティングということ。す
何かことを起こそうとするときは、それをやらないと多
数派工作ができないのです。

アメリカの労働運動も、冷戦時代は、何もしい労働
運動と言われていて、組織率も下がり続けていたのです
が、AFL-CIOという大労組の執行部が変わつて少
数派とも連帯しようということを始めた。「女性とか障害
者とかパートとかを掘り起こさないと組織化ができない」
というところまで追いつめられて、彼らが始めたことは、
サマースクールを開いて学生にオルグの練習をさせると
か、「これで一日戸別訪問しなさい」と組合員にお金を渡

して戸別訪問や、電話をかけて、何をして欲しいかを聞いて、調べさせるといったことなのだそうです。ニーズを実証的に調べることで、かなりいろんなことが分かってきたといいますが、こうした実態把握をきちんとするのは必要なだろうと思います。

それと、さきほど堀田さんがおっしゃったように「違う」ということから出発しないと、ものごとが始まらない。今言ったニーズをすくい上げるマーケティングにしても、「自分が思っていることを、他人は思っていないだろう」ということが前提です。みんな同じだと思っているところにはマーケティングはない。違いを見つけたら、その次には、違うから一緒にできないということではなくて、だったらどこで妥協できるかという折衷点を必死になんて探すということですよ。

それから、「義理フェミニズム」というのは、言われたからやっている、何かをしなければならないというフェミニズムのことです。ある一定の年齢の人たちの中ではフェミニズムは影響は大きかったし、しなければいけないという正義感や義務感からやろうというのは悪くないと思うけれど、それだけではつらいし、もたないのではないかと思うのです。したいこと、やりたいことから始めるべきではないか。

この前、アメリカの労組の活動家の男性が来日して、組織化の戦略というのを教えてくれた。

第一に、コミュニケーション・システムを双方向であるようにつくりあげる。全員からメッセージを送ってもらうシステムをつくる。返信用のはがきで書いてくれとか、ツウウェイでのコミュニケーションシステムをつくり上げる。

第二に、先ほどのNPOマーケティングと言いますが、組織に加入している人たちの関心を明らかにする。つまり、組織する側の思いこみを正すための調査ですね。

第三に、自分の持っている長（短）所、相手側の長（短）所をよくつかむ。

セルフエスティーム（自尊心）という言葉がありますが、これはすごく大事なことです。そのためには、今、自分が持っているものをあげて整理してみることです。先ほど専業主婦で有償ボランティアだと発言した方がいましたが、確かに厳しい状況だと思えますが、少なくともその人は今すぐに稼ぎに行かなくてもよいという長所は持っている。それを土台にして次にしたいことをすることができるんです。でもその人達の短所もある。それは、夫に食べさせてもらっているために、夫に逆らってまで自分のしたいことができないということかもしれない。

短所と長所（できること・できないこと）を明らかにして幸福の道を考えるということです。それは、克服すべき相手に対してもそうです。何をやられたら相手は弱いかということを徹底的に分析してから起こさないと、先ほど言った因果関係もわからぬままに労力を使うことで願いをかなえようとする「お百度詣り」になってしまふ。いくらやっても相手が痛くも痒くもないことを、繰り返し返してやってもしょうがない。相手が痛いのは何かということを徹底的に分析することは必要だと思います。その上で、当面達成すべき目標を設定して人々にそれを周知させる。何を当面の目標にするかを言葉化し、広めるためにメディアが必要だったら、それを調達する。

そういうかたちで戦略がいつばいできるんです。その基礎になることは「違いを明らかにすること」と、自分が何を持っているか、現状を整理・分析して、足りないものがあつたらそれを他人から調達したり、協力を求めたりする。そういうふうなことを綿密に考えるということだと思います。

具体的なことについてはあまり触れませんが、さつき久場さんが政策課題についての優先順位を言ってくれたので、ま、いいかと思つていてのことと、それから皆それぞれが多様で抱えている問題も違いますから、発想の枠

組みだけをとりあえず提示しようと考えたのです。

こうして、それぞれの課題の中から共通にできるものをピックアップして、一緒にやる。例えば、インターネットなども個人が発信できるツールですから、メールを送ったりホームページもつくったりして、「こんなふうな作戦を立てたら、こんな点がうまくいったよ」と具体的な情報を発信しあつて、ノウハウを蓄積していけば楽しいんじゃないかと思つています。■

（二〇〇〇年五月二十七日／まとめ・稲邑恭子）

玄米を精米する

榊原 和子

熊本県菊池郡大津町立菊阿中学校

はじめに

人にとつて「食べる」という行為はどんな意味があるのでしょうか。「食べる」行為が、生きていくのに必要な栄養素を単に摂取するためでないとすることは、『We』の読者ならおわかりでしょう。しかし、目の前の子どもたちをみていると、「生きていくのに必要な栄養素を摂取する」ことすら、食べる目的として感じないような気がします。そんな子どもたちに、食べものを原点から意識できる感性を育てたいという思いで授業をしています。

玄米を精米するこの授業は、「作って食べたい」という思いでいっぱい的一年生への、食の最初の授業になります。日頃何気なく食べている

「米」との出会い直しです。

実際の授業の流れ

①「これ何かわかる？ よおく観察して！」

まず、手の平いっぱいのお米を子どもたちに見せます。この時の反応は身近に感じられる環境にいる子ども、身近な暮らしに目が向いてる子どもとそうでない子ども、都会で炊飯された米飯の状態でしか「米」に接したことのない子ども等々、さまざまです。

一粒ずつ粉を配ります。観察させると、色、形、しわなどいろいろな答が返ってきます。早速、粉殻を取り始める子どももいます。そんな子

どもの姿を紹介すると、他の子どもたちも粉殻を除去し始めます。粉を知らなかった子どもたちも、「米だ」とわかります。白米でないことに気づく声が出てきます。そこで、「じゃあ白くしてみよう」と声をかけます。

②「どうしたら白くなるかな？」

子どもたちに投げかけます。爪でこする子、シャープペンシルの先でやる子……。「なるほど……、じゃあ手の平いっぱいのお米だったら？」
「調理室にある道具は何でも使つていいから」と言いながら、子どもたちにカップ一杯程度の玄米を配ります。ボール、ざる、すり鉢、すりこぎ、スプーンなどさまざまなものを使い始めます。

「おっ、なかなか考えたねえ」と子どもたちの工夫を評価しながら、「でもなかなか白くならないね」「白くならそうだけど、粉になっちゃうね」等と声をかけながら、「はだしのゲン、見たことある？」とヒントを出してみます。子どもの反応はいろいろでしょうが、アニメ好きの子どもだったら、ぴんときます。そこで用意していた一組の牛乳瓶と30cm位の竹の棒を出して見せ、手渡すと玄米を瓶の中にいれて搗き始めます。

その様子をみんなに紹介しながら、次の時間はこの方法で玄米を精米するので各自瓶と棒を持つてくること、竹は穴があかないような状態で切つてくることを伝えます。

③ 「目指すはこれ！ 自分で白くした米は炊いて食べるよ！」

精白米を見せ、自分で搗いた米を食べることを伝えます。子どもたち

はがぜんやる気を出して精米し始めます。足に瓶を挟んでやる子、床に座つてやる子、すでに白くなつている子どもに「ちよつと棒を貸して！」と頼む子……。休み時間も惜しむかのように子どもたちは2時間ぶつ続けて精米していきます。

搗精しながら、途中でざるを使つてふるつていきます。「黄色い粉が出てきた」「米がつぶれとる」「米の色がいろいろ」「端っこに白いものがついているものもある」といった子どもたちの気づき、つぶやきを拾つておきます（そのつぶやきを後の、「糠」「七分搗き、五分搗き、精白米」「胚芽米」といった言葉の学習とつなげるのです）。

⑤ 「いろんなことに気づいたね」

精米を3〜4時間。その後、その米を炊いて主食とし、副食は卵を使つて、米飯に合う副食を個人単位で

調理して食べます。

子どもたちの「調理したかったあ」という思いが一気に爆発したような生き生きとした姿があります。自分で精米した米は、労働を経た食べものとしておいしかったという感想が出てきます。教師が圧力釜で炊いた玄米との食べ比べもします。

その後、まよめの学習として、稲穂から精白米までの変化を、言葉を通して確認します。その途中で出てくる「わら」「籾殻」「糠」の用途や、米の部分ごとの栄養について学習します。

「米」は食べるだけでなく、日本人の生活のいろいろな場面で利用されていたこと、捨てられている部分に実は栄養がたくさん含まれている矛盾に気づく子どもが出てきます。

そんな「気づき」を出し合いながら、「米」を通していろんなことを考えたり、気づいたね」とまとめます。

〈大ちゃんママのお困り相談室〉

とりあえず最終回編

藤原 裕子

最終回は、きつとどこの家庭でも一度や二度や四……十度？位お困りになってしまったであろう、あのレンタルビデオ屋さんの話です。

私の家でもその昔、今は小学五年生の上の娘が三歳、夫とお店に行った時のことです。自分のことで気をとられていて放し飼い状態つてよくありますよね。子どもは子どもで、まあ、キッズコーナーのアンパンマンとかに夢中と親は思っているのではありません。その時、どこからか娘の「パパァー！ パパの大好きなオツパイがいつばいあるよおー、来てごらあーん」と天真爛漫な声が店中に響き渡ったとき。夫はもうこっぴげずか

しくつて、娘を小脇にかかえて、そそくさと帰つて来たのでした。

それももう七年も前のこととて、大ちゃんに関して少々油断をしておりました。あの日、家族四人で、レンタルビデオさんへ。そして、それぞれが好き勝手に自分のコーナーでビデオを決めて、さて借りて帰ろうという時のこと、大ちゃんが見あたりません。三人ですみずみまで探し回ったがいけません。「まさか一人を外に出ちゃったとか？ 誘拐!!」もう恥も外聞ありません。「大ちゃん、いたら返事してー！」と母が一発どなりましたら、なんと奥のピンクのカーテンをくぐりぬけ、仁王様のようになつてくる大ちゃんがいたので。鼻息も荒く……。「ゲーツ！ あの中見ちゃったの？」私たち一家は何と言つていいのやら、押し黙った

まま静かに店を後にしました。夫との会話「うかつだった……」「行っちゃダメツつて言つておくべきだった」「どんな心の傷になつちやつたらうか」etc……。

そして大ちゃんの質問せめが始まりました。「ママ、なんで女のこのとハダカにしてんの？」「なんでみんなおっぱい出してんの？ 恥ずかしいくないの？」「男の人がおっぱいさわつてたけど二人は兄妹？」（うちでは家族はハダカを見せ合つてもさわつてもOKということになってる）そして、おフロに入った時のこと、私の股間をさわつて、「こうされたら気持ちいいの？」……もうマシンガンのような日質問にうちのめされた私でしたが、その時力強かつたのが娘でした。「あーいう所は日な大人の人が行く所で、子どもがいつたらお

まわりさんにタイホされちゃうから
行っちゃダメ!」。答えになつてない
けど、H大嫌いであーいうのを見ると
気持ち悪くなるという正反対の娘に、
大ちゃんもなんだか納得して「もう
行かない」と約束していました。

それにしてもTVでも普段何気な
く見ているものも、大ちゃんにとつ
てはもうコーフンもので「桃の天然



ギンギン
ガラガラ

水」の水着の女の子三人がプールサ
イドでおどるCMとかは「なんで水
着なの?」とかいつも聞くんですね。
あまりにも、いつもいつも「なん
で?」と聞くので、「男の人は、おっ
ぱいとかハダカとかTV出ると、お
っ!」とかつて注意して見るから
でしょ」と言ったら、「ママはパパに
ちゃんとおっぱい見せてあげなよ、

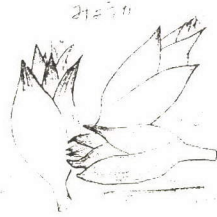
そしたらほかの人の見たいと思わな
いと思うよ」とわけのわからないこ
とを私に忠告してくれました。

それにしてもこう見ると、HなC
Mって多いんだなあって思いました。
お宅ではどんな風に答えてあげてま
すか?

こんなこともありました。自転車
に大ちゃんを乗せている時に突然
「ママ、大太はいつ少年になるのかな
あ」なんて詩人のようなことをつぶ
やく大ちゃん。「Hにかけてはもうす
っかり少年でしょ」と心の中で答え
る母でした。そして夜な夜な母のT
シャツにもぐつては、おっぱいの間
に顔をうずめながら「あゝっ! お
っぱいの世界」と、コーコツの表情
の大ちゃん、もうすぐ五歳児のこの
先にどんなHが待ちうけていること
やら、楽しみでもありますが……。
めでたし、めでたし。

食の歳時記

坂本 薫

夏はやつぱり
冷やしそうめん！

育休中の夫と今年一月に生まれた赤ん坊、二歳の子の三人を残し、娘は小学校へ、私は仕事へと出かける毎日である。残された夫は、哺乳ビン嫌いの赤ん坊に冷凍母乳を飲ませるのに四苦八苦し、まだおむつの取れない二歳の子に翻弄され、午後は帰ってきた勉強嫌いの娘に宿題をさ

せるのに手を焼く。片づけても片づけてもすぐ散らかる部屋、泣きわめく乳幼児……。そんな中で「主夫」である夫は、二歳の子と自分のための昼食を用意しなければならず、さらに夕方が近づくと、家族全員分の夕食の準備もしなければならぬ。

ゆとりがあれば、その日安く手に入った新鮮な旬の食材で、栄養バランスも考えて食事づくりに取り組むであろうが、そんなゆとりも、買い物に行く暇すらないことがままある。

そんな昼どき、夫にも手軽にできるのが冷やしそうめんだ。泣いていた子どもも泣きやんで、「ちゆるちゆる！」と言って大喜びで食べる。そうめんなら買い置けるし、すぐにゆで上がるし、暑さで食欲がないときにも食べやすく、とても重宝だ。

そうめんは、やはり手延べそうめんが喉越しも滑らかで断然おいしい。

少々ヘタクソにゆでてでも、手延べならおいしくいただける。

機械そうめんは、うどん、冷麦などと製法が全く同じで太さが違うだけだが、手延べそうめんは作り方が全く違い、表面に綿実油やごま油を塗ってよりをかけながら熟成させつつのばして作られる。

手延べそうめんは、梅雨期を倉庫内で過ごすいわゆる厄を済ませ、夏を越した古物の方が、酵素作用により風味や食感、油の香りがよくなるとされる。また、ゆであがったそうめんを水でもむようにしてよく洗うのは、表面の油を除くためである。

ここ播州はそうめんどころ。「掛保乃糸」と称する龍野そうめんは、龍野の淡口しようゆと共に全国に名を馳せている。我が家から少し郊外へ車を走らせると、冬によく晴れた日には、そうめんを竿に干している光

景を目にすることができると。

そうめんどころならではの食べ物に「ばち」がある。乾燥の際に上下2本の竹に8の字形にかけられた麺の両端は、Uの字形になって乾くので切り落とす。その部分が「ばち」である。太く、塩がたまっていて塩辛いがなかなかおいしく、味噌汁の具としてよく利用される。このあたりでは、スーパーにも置いてある。

そんなそうめんどころというのに、短大の調理実習でそうめんつゆを作ると、「市販のつゆを買わなくてもこんなにおいしくできるとは知らなかった」などという輩が結構多く、びつくりする。麺は三分程度ですぐゆで上がるため、かえってつゆを作るのが面倒なのだろうか。

そこで、ここでは普通の作り方ではなくて、おいしいそうめんつゆを手抜きで常備する方法を紹介したい。

〈簡単常備—そうめんつゆ〉

- ① 淡口しょうゆとみりんを一对一で合わせ、「沸騰」させておく。耐熱容器に入れて電子レンジで加熱してもよい。これは腐らないので、多めにつくって常備しておくときさらに楽。
- ② 時間のあるときにだしをきちんと取って、製氷皿で出し汁のキューブを作っておく。
- ③ 食べるときに、つゆとだしを一对二で合わせる。

「沸騰」させればかりの熱いつゆであつても、だし汁の水でみるみる冷やされ、冷たいつゆに早変わり。これでいつでもすぐに、市販のつゆよりおいしく食べることが出来る。

だしは普通に昆布とかつおで混合だしを取つてもよいが、このあたりでは、干しえびでだしを取る家庭も多い。干しえびのそうめんつゆは、甘味があつてたいへんおいしい。

しょうが、ねぎ等の薬味は是非用意したい。薬味の中では、私はみょうがが大好きだ。

七、八月に取れる花蕾を夏みょうがというが、みょうがのさわやかさは夏にぴつたり。小さい頃裏庭に植えてあり、夏の味覚としてそうめんとともに楽しんだ。子ども心に、大人になって自分の庭を持つようになったら是非植えたいと思つていたことを懐かしく思い出す。

冷やしそうめんの薬味としてシンプルに味わうのもいいが、たまには焼いてもおいしくいただける。

へみょうがの焼きそうめん

- ① そうめんはかためにゆでる。
- ② 薄切りにしたみょうがとそうめんをゴマ油で手早く炒め、しょうゆで味付けする。
- ③ 花かつおをたっぷりまぶす。

(さかもと・かおる／短大教員／イラストも著者)

児玉 陽子さん

松井病院食養内科顧問

「食養」のすすめ

はじめに

市場に添加物が溢れ、農薬、ダイオキシンなどの複合汚染が進む昨今、食べ物の安全性が気にかかります。でも、あまりそのことにこだわると、スーパーのかごをもつて右往左往、何も買えなかったということになりかねず、不安や心配を抱くことがかえってからだに悪く働いてしまうという悪循環にはまってしまっています。神経質になりすぎずに身体により食生活を確保するにはどう

したらいいのでしょうか。

三十数年にわたって、食養内科で食餌療法による体質改善の指導に携わってこられた、東京都大田区の松井病院食養内科顧問の児玉陽子さんにその秘訣を伺いました。

食養内科とは？

松井病院に日本で初めての「食養内科」が創設されたのは二十年前のこと。いわゆる「生活習慣病」が増え、これらの治療は医者任せ薬任せでは治らない、患者自身が努力しなければならぬものであり、特に食生活が非常に重要な鍵になっていることが大きな課題になってきたからでした。

現在の医学教育の中では、大半の医学部では栄養学の講座がなく、医者が適切な食事指導のアドバイザーができないことが盲点になっていま

す。さらに栄養学校等で教えられている栄養学が、日本に昔からあった伝統的な「食養」の知恵はほとんど取り入れられないで、カロリーや蛋白質を重視した西洋栄養学であり、日本の気候風土や人体の栄養吸収性や排泄の多様性を考慮に入れていないことはひとつの欠陥と言えましよう。

「冷え性」が治療の妨げに！

「食餌療法はだからやらやるよりびしっと短期間やってみることから入るのがいいんです。習い事と同じで、型にはまった形式でまずやって、それから徐々に自分自身に合ったものにしていく。私はまず二週間びっちりやってもらいます」と、児玉さん。

児玉さんによると、治療効果は当然個人差によるばらつきがあり、そのひとつとして、夏の冷房、身体を冷やす食品の摂取、下半身の薄着

などが原因で下腹部や手足が冷える
「冷え症体質」が治療の妨げになっ
ていることが意外に多いそうです。

冷え症を防ぐためのさまざまな予
防策は、アレルギーにならない離乳

食の研究(『アレルギーにならないた
めの離乳食』松井病院食養内科グルー
プ 緑書房)と共に、児玉さんが長
年取り組んできたもうひとつのプロ
ジエクトです。

まず、「全体」を見る
「あれがいけない」「これがいけな
い」とあまり禁止事項を多くすると
実行できないので、まず全体を見た
上で選択の優先順位をつけること

1. まず、主食は未精白のものを食べること。
玄米がいちばんバランスに優れ、生命力もありますが、
玄米に抵抗がある人には、三分搗き米、五分搗き米、胚
芽米などがおすすめです。また、麦、粟、稗、キビ、ハ
トムギなどの雑穀を混ぜるなど様々な工夫で変化をつけ
ることができます。
2. 副食は豆腐、大豆製品、野菜類、海藻類を中心にしま
しょう。
3. 動物性蛋白は控えめに、肉よりは魚介類を、抗生物質
などを投与されたものはできるだけ避けたいので、養殖
魚でなく、自然の状態にいちばん近く値段も安い大衆魚
がおすすめです。
4. 油脂類は控えめに。植物性(不飽和脂肪酸)を主にと
りましょう。
5. できる限り国産の、季節の食材を選びましょう。
6. 塩分過多にならないように。質の良い味噌、醤油、自
然塩で薄味に調味しましょう(化学調味料はできるだけ
使用しないこと)。
7. 砂糖には要注意。白砂糖をやめましょう。ハチミツや
黒砂糖を少々控えめに使うようにしてください。
8. 果物・菓子類を控えましょう。果物はビタミンCの供
給源と思われるようですが、糖類が多く、またから
だを冷やすもとなります。
9. 香辛料、アルコール飲料、清涼飲料水、缶詰類、イン
スタント食品類も極力控えましょう。
10. 食品添加物の摂取と農薬使用の食品については十分注
意しましょう。
11. 牛乳、乳製品、卵はあまり頻繁に摂取しないように。
12. 和食を中心にししましょう(カタカナメニューは控える)。
13. 良く噛んで、腹八分目に、感謝していただきましょう。

が大切です。基本的な目安として、前ページの十三項目を参考にして、やれることからやってみるとよいでしょう。

米・調味料・水の三つから

以上の原則をふまえた上で、特にまず気をつけたいのは、米、調味料、水の三つです。

米は無農薬や化学肥料をできる限り使わないもので、未精白のもの。

調味料は天然醸造のものを使う。

水は浄水器をつける。これは高価なものからいろいろありますが、とりあえず塩素が取れる程度の簡単なものでいいでしょう。

米は生産者と契約して送ってもらうというのもよいでしょうし、また米、調味料（味噌、醤油、酢、みりん、塩）は自然食品店等で入手できます。この三つだけはやろうと決心

していただければ、そんなに負担にはならないと思います。

できるだけ、国内ものを

その土地に長年たくさん収穫されてきたものを旬の時期に新鮮な状態で偏らずに摂取するのというのが、私たちに時代を越えて伝えられてきた健康維持の知恵の基本なので、病気になる人には国内で採れたものを摂取するように勧めています。

けれども、日本の食糧の自給率は飼料を含め四二％。人間の口に直接入るものでは三〇％を割っている状態なので、厳密にやっていたら、経済的にも時間的にも大変なことになってしまいます。健康な人はそこまで厳密にしなくていいでしょう。

できるだけ、偏りをなくす

また、味噌・醤油などの調味料を

含めて一日三〇種類の食品を摂るのが理想と言われていますが、これもあまり拘り定規に考えないで「偏りを無くす」よう心がける目安にしてください。

獣肉類の蛋白質はなるべく控え目に、食べる場合はその二倍から三倍の量の野菜を採るようにしましょう。つまり蛋白質を150グラムだと、野菜を300〜450グラム採ればよいということで、その程度の量を目安に守ればよいと思います。

特別の病気になつているときは症状に応じた個別の立ち入った指導が必要ですが、健康な人の平素はその程度で十分でしょう。

日野式食養法

私が師事した日野厚先生の「日野式食養法」ではその他にも「ひとつのものを全体を食べる一物全体食」や、

「煮こぼし、ゆでこぼし、あく出し、穀物のとき洗いはほどほどに」「いついかなる場合にもだれもがどんな食べ物でも『生食がよい』とか『長時間の加熱食がよい』などととらわれるべきではない」「食事直前・中・直後に湯茶などを多量に飲まない」（胃液が薄まって消化能力が落ちるから）等、なるほどと思われる興味深い指摘があるので参考になさってください。

よく噛むこと、少食は健康の極意
何よりも一番大切なことは、とにかくよく噛むことです。最低三〇回は噛む。胃腸の弱い人は百回くらい噛む。柔らかいものでもよく噛みまます。胃潰瘍の人でも、おかゆなどの流動食を噛まないで食べるより、ちよつと固めのものを徹底的に噛む方が効果が上がりやすい。

昔はお母さんが赤ちゃんに口で噛んで柔らかくして食べさせていた、あれがいいんです。忙しいから噛めないという人にはおむすびにして仕事しながら歩きながら噛むように勧めています。

いまはほとんど総ての食品に添加物が入っていますが、良く噛むと農薬や添加物の害も九五%減らすことができますというデータがあります。

糖尿病の人も特別食をどう作ろうかと悩むより、よく噛むと太らないし、血糖値も下がります。「よく噛むこと」と「少食」が健康維持の極意です。生活習慣病のほとんどが食べ過ぎが原因と言っても過言ではありません。

健康な食生活の秘訣はよく噛むことに尽きるといっていいのです。惚け予防にもなりますし、噛むと足腰もしつかりします。噛まない顎も

発達しない。ですから赤ちゃんの離乳のときにせひするめや昆布をしゃぶらせましょう。離乳食の時期の食事はその意味でとても大事です。脳への刺激になって、子どもの成績も良くなります。

骨粗鬆症は六五歳以上の病気のトップですが、これも子どもどものときからの食生活が悪いんですね。

また、拒食と過食は裏返しですが、過食症の人は精神的な安定がないから噛めない。その意味でよく噛むことは精神的に安定するためにもいいんです。

●松井病院食養内科

東京都大田区池上2-7-10
電話03-3752-1124

『SQUARE』Vol14 (レジャーサー
ビス産業労働情報開発センター発行
に掲載したものを再録しました。

連載 新・オホーツクの潮風荒く

江口凡太郎

北海道滝上高等学校 家庭科

「家族の授業ではどういう話をしたんですか？」こう言われて、私は一瞬ドキッとしました。「M子、なんか言ってきた？」なんか嫌なおもいをさせたのだろうか？という不安が脳裏をかすめました。

その日、M子は担任と入学後はじめての個人面談をしました。担任の「高校の授業はどうだい？」というような問いに、M子は次のように答えました。

「家庭科で『家族』の勉強をすると聞いてやだなあって思ったけど、せんせーが家族はいろいろあっていい

って話してて、そーゆう授業ならいいなって思った」

この点の配慮は「熊本時代」(注1) みっちり鍛えられたつもりですが、慣れとおごりの「自覚症状」のある昨今の自分の気持ちを引き締める機会となりました。家庭科は、授業者の生き方や価値観が、良くも悪くも伝わりやすい科目なのだと、あらためて実感しました。

今年も河野美代子さん著「さらば悲しみの性」朗読授業シーズンがやってきました。昨年、感情移入をしすぎて、具合悪くなる生徒を出したということをつかり忘れて(本連載一九九・七号)、今年も気持ちをこめて、力を込めて、「ハイ」な状態で授業しました。「彼女のお腹の中から膿が……」読んでるウチに、演出が過剰になり、バタンツ！「キヤー」一人の女子生徒が突然倒れました。

教室中大騒ぎとなり、職員室から全先生が駆けつけ、担架も教室に運ばれました。幸い、すぐに意識は戻り、大事には至りませんでした。

昨年、「指導部長」で何度か授業中緊急出勤しましたが、今年度「全員緊急出勤」第一号を私が出してしまいました。

その生徒は、養護教諭に「話を聞いてるうちに、あまりにもすぐくて気持ち悪くなった」と話していたそうです。

翌朝には、職員全員に「担架搬送法」というプリントが配られたり、後で、担任からは「生徒が気絶する授業って、どんなことやったんですか？」と聞かれたり、三年生からは「せんせー今年もやったの？ あー俺ら授業無くてよかった、気絶したくないもん」など、冗談、本気いりみだれた批判にさらされました。

次の時間、朗読は中止し、つづき

をプリントして配りました。生徒は素敵な感想を書いてくれました。

この学校の子どもたちは本当に感性豊かなすばらしい子どもたちです。♀この一五歳の女の子はすごくかわいそうだと思った。入院して病気になる途中なのに、彼氏とやっつるってゆーのが、一番ビツクリした!!! 一回でいいからこの先生に会ってみたい。きつとすごくいい先生なんだって思う。

♂人は好きな人といるときが一番幸せだと思うから、そんなこと(性交)するより病室で楽しく話していた方が絶対楽しいと思う。

♀すごくかわいそうだと思った。もつと早くに自分が「性欲のはけ口」だということに気付けばこんな事にはならなかったのに……

♀私は彼女のような性交を絶対に持ちたくないと思った。けれど、彼女の気持ちだけはわからなくもな

いと思う。好きだからいいってゆう素直な気持ちで行うことは悪いことじゃないと思うから。でも、今度つき合う人は彼女の事を一番に考えてくれて、性欲に負けないような気持ちを持つてる人、そんな人とつき合つて欲しいと思つう。♀どうして自分の体より彼氏の方を大切にできるかがわからない。きつと彼女は彼に嫌われるのがこわくてことわれなかったのだから、私と同じ立場なら、こんなになるよか別れるほうがよっぽどましだと思つう。

ご意見・ご感想お寄せください。

北海道紋別市南が丘町3-10-19

江口凡太郎 〒094-0013

(注1) 大学卒業後、熊本大学教育学部の研究生として「留学」し、本誌に「一発ネタ」を発信している桑畑美沙子さんたちの「熊本家庭科サークル」の実践を体験的に学ぶ。

● いつからでも始められるアサーション・トレーニング

自分の、言いたいことをきちんと表現する方法を学び、コミュニケーション能力を高めます。

◎毎月第4月曜日(月1回) 19:00~21:00 ◎定員12名 ◎参加費3200円(1回)

● アダルトチルドレン脱出講座(自分を育てるためのワークショップ)

自分を大切にする技術を高め、人とつながるためのコミュニケーション能力を高めましょう。

「一番信頼のおける自分の味方」を自分の中に育てるレッスン入門編です。

◎毎月第4土曜日(月1回) 14:00~16:00 ◎定員12名 ◎参加費3200円(1回)

● 電話カウンセリング フェミックスカウンセリングルーム 0990-511320

……遠方の方、外出できない事情のある方のために電話カウンセリングを行っています。

*時間帯:月~金10:00~20:00(ダイヤルQ2のシステム 料金3分あたり300円プラス通話料)

f e m i x

いつのまにか元気になれる場所

資料ご請求ください。

TEL/ FAX 03-3424-3603

URL: <http://www3.alpha-net.ne.jp/users/femix/>
e-mail: femix@mail2.alpha-net.ne.jp

女が歳をとるといふこと

木村 栄

ピンポーン。

またか、とうんざりしながらインターホンを取った。

「**信用金庫です。こちらの担当になりましたので、ご挨拶に」

「間にあつてまーす」

「ちよつと顔だけでも見てやつてくれませんか。そーですか。では、名刺を入れておきますので……」

ついでの方に、ポストを覗いた。名刺ならぬ手書きのチラシが入っていた。自己紹介と手足のついた大きな似顔絵に、地域の皆さんの手足になります、と書いてある。

**信金は住宅街の懐深くにあつて、駅や郵便局やスーパーに行く時の「ついで」利用ができない。その

不便を、電話一本で駆け付けるサービスでカバーします、ということらしい。

後日。また、チラシ。

「お目にかかれなくて残念です」と、例の似顔絵が涙をこぼしている。「風邪に気をつけて」の見出しの下に、生姜湯と卵酒のレシピが載っていた。なかなかやるワイと、感心した。

次のピンポーンでは、「積立のお金も予定もないから」と断つたのだが、「昨日や今日で、まさかそんな虫のいいことは考えてません。開けて下さるだけでいいんです」と粘る。

何だかほだされてドアを開けてしまった。似顔絵とは全然似ていない若い顔が嬉しそうに崩れた。

ああ、よかった。ありがとうございます。人の顔を見るとほつとします。一日脚を棒にして、戸を開けてくれるのは一軒あるかないか。ドアに話しかけてインターホンの機械的な声で剣もほろろに拒絶されて、来る日も来る日もそれが続くと気が滅入ってきます。何だか人間不信になりそう……。顔見て声を聞いて話を聞いて貰えるをやつと営業してると気分になれて、救われるんです。一軒でもそういうお宅があると頑張れるんです。

しまった、やつぱり出るんじやなかった。スーツ姿が板につくかつかないかの若者の、こんな愚痴を聞いてしまったら、世間の荒波に揉まれている同じ年頃のわが子の姿を見るようで、つい何とかしてやりたくなくてしまふではないか。

大曼蛇羅

図鑑

連載●第14回●蔦森 樹

二か所同時に引つ越しをした。だが、ほととずる間もなくまた引つ越した。月に三度も引つ越せるくらい「豊かな人生」と笑うことにしたが、転居先を決めた翌朝に声が出なくなつてしまった。笑えない。音も出ないのだ。

関係者のみならず、メモを渡した瞬間、多くの人がすごく慈愛深い人に変身したのだ。た。

「この保険証は、あなたの？」と受付で看護婦さんに聞かれるのはいつものことだ。今回は口がきけないので、性別欄を指さし『私はニューハーフだから』と本意ながらもわかりやすい表記でメモを渡してみた。すると、

「まず変な目で見られていたわたしに、人がこんなにも優しいなんて・・・」

「あ、ご心配なさらしないで」と優しく微笑まれたのであった。診てくれた先生も薬局の人でも不思議とみな優しい。二週間の完全沈黙を言い渡されたけれど、人がこんなに優しくしてくれるのなら一生喋れなくてもいいのではないか、とすら思えたのだ。それは医療

涙が出ちゃつたのである。治るのが嫌だと思つた。それに必要な事をメモにすれば不便はなく、一日中沈黙しても苦痛に感じないのだった。逆に普段喋つていた内容が悪口や噂や良い悪いの判断ばかりと気がついて、身悶えるほど恥ずかしくなつた。人の話も聞いていたようで聞いていなかつたなあ。要するに、知らず知らず「高ビー」で、世間から身を守るために「攻撃的」になつていたのだ。

B級アクシヨン映画の効用

—ジョン・スタージェス「日本人の勲章」など—

武田 秀夫

「タケダさんはマッチョだからなあ」と言われたことがある。マッチョなる符牒が何を意味するのかよく知らなかったが、もしかしたらと思ひ当たらないでもなかった。

たとえば、まだ教師をしていたころ、マッチョなる符牒が今ほど流通していなかったところに、生徒が金属バットをもつて暴れたら、仕方がないから左腕の一本はくれてやろうと、そんなマンガのようなことを思ひ、さる雑誌の座談会で発言したことがある。

「そこをどけ！」と叫ぶ生徒の前に立ちはだかり、それでもなお打ちかかってくるなら、仕方がない、初めの一撃は左の腕で受け、その上で、右手一本で相手の動きを制することぐらいは俺にもできるだろう……。

もちろんそれは、〈よい学校〉であろうが〈悪い学校〉であろうがそんなことはかわりなくある意味では不可避的に押し寄せてくる〈校内暴力〉の波に翻弄される現場教師の、俺たちは状況の最先端でそれを引き受けさせられているのだという諦念をともなった、苦笑まじりの述懐とい

ったニュアンスの発言だったが、まあ、今ごろそんな昔話をしても笑われるだけかもしれない。これはまたなんと滑稽で貧しい状況への対応ぶりであろうかと。

なるほど、いかにもハリウッド製西部劇やアクシヨン映画にイカれた男の抱きそうな妄想的述懐ではある。それが証拠に、過日ぼくは、自分にとつての幻の映画「日本人の勲章」(ジョン・スタージェス／一九五五年制作)がテレビで放映されるのを知つて驚喜し、塾の授業を終えるや居間に駆け上がった大童でスィッチを入れたものだ。何事かと妻はあきれ、ぼくはビールをグビツと上の空でやつて、あとは画面に釘付け。

おお、懐かしきシネマスコープ！ その細長い画面をいっばいに使つて列車がやつてきて、隻腕の老婦還兵スペンサー・トレイシーが荒野の小駅に一人降り立つ。彼の目的は何か。ポーチの椅子を揺らしながら猜疑の目で見守るリー・マービン。どんぐり眼まなこをぐりつかせるアーネスト・ポーグナイン。陰気な口バート・ライアン。なんと見事な顔

ぶれであろうか。その上さらに、そうした無法者に町を牛耳られて為す術もない酒びたりの保安官、ディーン・ジャガー。西部劇の常套にびたりとはまって、もう涙が出そうだ。そして、老スペンサー・トレイシーも定石どおり、錚々たる(?)悪役どもの迫害・妨害にあつていったんは町から逃亡しようとするが、その最後の瞬間、度重なる侮辱に思いを決して立ち上がり、隻腕をふるってアーネスト・ボーグナインを酒場の床に叩きのめす。

銃を用いず、片腕だけであつという間に悪漢をやつつける見事な立回りに接して陶然となつた頃は(四十五年ぶりだ)、突然、もう一本の別の映画を思い出した。

主人公はやはり片腕をギブスで固定した若くおとなしげな負傷兵。舞台はニューヨークの地下鉄車内。深夜である。乗り込んできたチンピラたちが女性客らに陰湿ないたづりをしかける。大きなホクロのある黒髪・黒眼のあの悪役、いかにも剣呑な雰囲気を持たせていたが、さて、なんという俳優だったか。監督はラリー・ピアース? 疾走する深夜の車内を恐怖が支配し、だれも止めに入ろうとしない。が、エスカレートするチンピラどもの暴力についてもその兵士が立ち上がり、ナイフの攻撃をギブスで固めた片腕で防ぎつつこれを打ち倒す、そんな映画だったが、どうやらほくのいざとなつたら片腕をくれてやるというアイディアの源はそんなB級アクション映画にイカれた体験にあつた

らしいことに卒然と気づき、そのことにもまたしくは苦笑を覚えずにはいられなかつたのだが……。

話を戻そう。となればなおさら上等な(校内暴力)への立ち向かい方ではなかつたことを認めざるをえないが、しかし、教師をしていたころ、いろいろなことが重なって事態がいったんそうなつてしまつたら、仕方がない、理屈は抜きにして、おれは、現場の人間として、もはや身体を張つて子ども(たち)をとりあえずとめるしかない、そう思つていたことはたしかだつた。そして、左腕一本くらいの責任は、(校内暴力)という形で噴き上がったものに対しておれは引き受けなければならぬ、そう思つていたこともたしかだつた。暴れている子どもたちに直接かつ具体的な責任があると思つていたのではない。この時代にこうして生まれ合わせ、学校という同じ場で出会つてしまつた以上関係がないとは言えない、やつぱり責任はあるなという、むしろ共生感(そんな言葉があるかどうか知らないが)といった言葉で表すしかないものに発する思いを抱いていたことはたしかだつた。倫理あるいは使命感などという上等なものではない。暴れる子どもたちを憎んだことはなかったし、むしろ好きだつた。こいつら、なんだか放つておけないじゃねえか。仕方がない、腕一本ぐらくれてやるよ。そんな感じだつた。

なるほど、これではマッチョと言われても仕方がない。

だが、職員会議中にその部屋の窓ガラスを棒切れで叩き割る生徒を後ろから抱え込んで動かさず、そのままの姿勢で時間をかけて興奮をなだめ、しばらくののちに「わかったよ、先生。わかったから放してくれよ」と言うのを待つて空き部屋に連れ込み話し込む、そんなことが日常茶飯の時代だったのだ。

ヒンシユクを覚悟で、もう一つ武勇伝を語ろうか。

四十二歳。教師をその一年かぎりでやめようと思いついていた時、体育の補教を引き受けた。中三の男子二クラスの合併授業。なかなか引き受け手がないのだ。モヤモヤしたものが生徒たちの間にたまりにたまり一触即発の状態にあることはよく分かっていたから、

「よし、これから相撲の勝抜き戦をやる。かかってこい」と宣言して四十人を相手に相撲をとった。昔の子どもたちとちがつて背は伸びても腰がヒョロついているから、うれしがって、あるいは目をむいて飛びかかってくるのをいったんは胸で受けて、それから右へ左へとひねりつぶし出し投げをくらわさせて全員を砂に這わせた。その挙句、「もう一丁!」と次から次とかかってくる中に副番長格、小牛の如き体格のA君がガツンとまともにこちらの胸に頭突きをかませたからたまらない、やつつけはしたものの、あとで気がついてみれば肋骨にヒビ。彼らが卒業して二、三年後、クルマを運転している横に轟音とともにオートバイにまた

がった若者がつけて信号待ちの時にこちらをのぞきこむ。

「あの時はどうも!」

ヘルメットをあげたのを見れば例のA君。ヤアヤアと声をかけ合い、とてつもなく懐かしい気持ちになった――。

やつぱりマツチヨ丸出しだなあと笑う顔が目に見える。そういういい気な男がいるから、反動で、女や年寄り、相撲の苦手な教師がひどい目にあうのよと言われそうだし、事実、言われもした。それはその通りだとぼくは認めつつ、俺にはこういう肉体的なやり方しかなかったのだという気持ちがあるし、女や年寄り、相撲の苦手な教師が、その人なりのやり方で、(とても俺にはできないと思わせる見事なやり方で)、生徒たちの前に立つて退こうとしなかった姿をぼくは見てもいる。要は、困難な状況の中で、成行きまかせにせず他の力に頼ることなく自らの身体を張る、(張るほどに強壮な身体がないと言うなら、その弱い身体でもいい)、別の言い方をすれば自らを賭ける、そういうことを人間はそれぞれの流儀で行うことができる、行うことがある、その、人間の中にあると思いたい可能性だけが今や希望だとぼくには思えると、そのことを言いたのである。

幼女の首に刃物を擬した少年が長時間にわたってバスの内部を支配しつづけた事件において――とてつもない恐怖が支配する状況の中で――右のことは言うに易く行うに難いことだったろう。だが凶行に及んだ少年、見せしめ的に

刺殺された高齢の女性については多くの報道がなされながら、幼女や女性を残してバスを「降ろされた」男性たちの逡巡や悔恨あるいは弁明といったものがほとんど報道されていないことがぼくには気になってしかたがない。

なぜあなたは少年によってバスを「降ろされる」にまかされたのですか。なぜみんなと一緒にとどまろうとしなかったのですか。なにがそれをできなくさせたのですかと問うことは問う側にとっても勇気のいることだし、それを問う資格がはたして恐怖に直面した人間以外のだけにあるのだろうかと考えてもしまう。

だが、ぼくは、そのことはやはり問われるべきだろうと思う。そのことが問われないかぎり、恐怖によって支配すればこれだけの人間を意のままに動かすことができるのだと世にしめして破滅した少年の後裔は次々と生まれてくるし、現に各所に生まれてもいる。

マッチョと笑われても仕方がないぼくではあるが、ハリウッド映画によくあるように、あの時狙撃手によって犯人の少年を（無力化）すべきだったとか、だから少年法を「改正」すべきだとかいうような、対抗的な（恐怖）の網を強権的に、人と人とが共に生きようとする時に生じる衝突や当事者性を柵上げる仕方だ社会に張りめぐらすことによって少年犯罪を抑止すべきだなどと言っているのではない。

そうした方途は、自分の親もふくめて今の人間は、恐怖によって支配・恫喝すれば皆自己保存に走り、身体を張って自分の前に立ちはだかることなど金輪際ありえないと冷静に見くびり見きわめた少年をとめることはできないだろう。そうした事態を根底からひっくりかえすには、なぜひとはそうした際にバスを降りるのかと苦しくても問い、苦しくとも答えるという対話がいろいろな局面でくりかえしなされることによって共生感覚の根を少しでも太くしていくしかないのではなからうか。少年の両親が最終的局面で、「説得する自信がない」と言わざるをえなかつたそのいたましさをぼくは今思っている。

共生感は、つきつめれば、共死感を一体のものとして孕まざるをえないだろう。あの時バスから降りないということ、わが子の前に立って説得することは共生の可能性と同時に共死の可能性として孕んだ。そうはならなかつたことを悦ぶべきかどうか。

バスを降りた人の予想されるその後の苦渋と、アウシュヴィッツ、大虐殺を死なずに生きのびてしまった人の、たとえばプリモ・レーヴィの苦渋にみちたその後の生（死）とを重ねて、さらに考えてみたいと思っている。（つづく）

不機嫌な装置（中）

竹信 三恵子

九〇年代後半、家庭面の記者として「専業主婦」と呼ばれる女性たちの不機嫌に接するまで、私は、「専業主婦」に暖かなあこがれとでもいつた感情を抱いていた。

●「近代化」の旗手

六〇年代、都心の小さな商店街の一角の小さな薬局で育つたため、周囲の大人の女性のほとんどは「商店のおかみさん」だった。母も含め、彼女たちは、商品を積み上げた雑然とした中で、いつも仕事に追われていた。友人には、勤め人の父と「専業主婦」の母を持つ人も多少はいた。商店の女性たちの活気と率直さ、自立心が、私は好きだったが、一方で、「専業主婦」家庭の友人の片づいた「子ども部屋」で、レースのカバーのかかったピアノを横に「お母さんの手作りおやつ」を食べたときの恍惚感、いまもおぼえている。

七〇年代後半の地方支局の駆け出し記者時代、大手メーカーの企業城下町といわれる街で、取材した「専業主婦」たちも、似たような人々だった。彼女たちは、「大変ね」「でも、同性のためにも頑張ってるね」と、「働かねばならない」私を気の毒そうに眺めた。風呂に入るひまもない、とか、ご飯もゆつくり食べられない、とか愚痴ると「うちのお風呂に入っくいきなさいよ」「ご飯、食べていったら」と、やさしく言うのだった。

その中の四十年代前半の女性は、「女は絶対に仕事をやめちゃだめよ」と、強い口調でいった。「夫と共に美しい家庭を築こうと」教員をやめて結婚したが、「企業ぐるみ選挙」で、夫は会社の指定した候補者に投票するよう迫った。企業ぐるみ選挙とは、七〇年代、革新政党の躍進に危機感を抱いた大手企業が、社員たちに会社の指定候補に投票するよう締め付けをかけて話題になった試みだ。

「それはおかしい」と、反対すると、夫は、「だれが食べさせてやっているんだ」といった。「お金は稼いでいないけれど、家事を分担しているんだから夫とは対等だと思っていた。でも、夫は、本音では食べさせてやっていると思っていたのよ」と、彼女はいった。

数年後、転職した私のもとに、彼女から「教員として再就職しました」というはがきが届いた。私は彼女が誇らしかった。

八〇年代初めに出版されて話題になったジャーナリスト齊藤茂男さんの「妻たちの思秋期」にみられるように、企業戦士の夫に取り残され、家庭に閉じ込められて鬱状態に陥る「専業主婦たちの憂鬱」は、すでに始まっているたのかもしれない。しかし、当時の彼女たちの中には、「妻は妻の役割、夫は夫の役割を果たしながら、対等で民主的な家庭を築く欧米型近代家庭実現の旗手」とでもいった一種のプライドに支えられ、その夢が破れば、いつでも仕事に復帰するのだ、という気概を感じさせる人もそれなりにいた。

●三つのタイプ

久々に家庭面で接した「専業主婦」たちは、かなり違っていた。年金の第三号被保険者制度について、「勤め人

の妻は保険料を払わなくても年金を受け取れる」と書いたわずか三行ほどのくだりに、「主婦」という読者から、「新聞は主婦を馬鹿にしているからこんな間違った記事を載せるのだ」との抗議の手紙が来た。電話番号も添えてあったので、電話をかけて、怒りの理由を聞いてみた。

彼女は、第三号被保険者は、夫が妻の分も払いこんでいるから年金をうけとれる、と思いついていた。制度新設時の新聞記事に「夫が厚生年金に加入していれば妻にも年金権ができる」とあったのを「夫が保険料も払っている」と誤読していたのだ。

その後も「新聞は働く女性のことばかり書く」「専業主婦の苦労についても書いてほしい」「専業主婦は、子育てや地域活動などの大事な仕事を担っている」など、ことあるごとに専業主婦からの怒りや抗議や訴えの手紙は舞い込んだ。八〇年代の半ばに、外で働く既婚女性の数は「専業主婦」を上回り、子育てや地域活動と仕事の両立に苦労する共働き家庭は増え続けていた。「地域活動や子育ては専業主婦の仕事。もっと評価しろ」と気張られても困るよね、と同僚と話しながらも、その反応の過敏さに、悩み続けた。

その変化の背景を知りたくて、私は、自治体の主婦講座の講師を次々と引き受け始めた。やがて、参加する

「専業主婦」は、ほぼ三つのタイプに分かれることに気づいた。

ある三十代後半の女性は、明るい表情で、「世の中には、いろいろ悩んでいる女性たちが多くいんだと驚きました。夫が何でもやってくれて疑問も持たずに幸せにやっていたので、別の見方を知るいいきっかけになりました」といった。

二十代の女性は「結婚退職の慣行で仕事はやめたが、夫の稼ぎは十分とは言えない。自分なりの収入を持って、もう少しゆとりがほしい」といった。「でも、働きに行こうと思っても、子どもが小さくみてくれる人がいない。仕事のみつかつても、パートでは給料が安すぎて、保育料も払えない。夫は、『そんな働き方では保育料の支払いのために僕の稼いだお金が持ち出しになる』と反対する。だから、最初の一步が踏み出せない」という。

一方で「主婦は立派な仕事なのに、どうして認めてくれないんですか」と反発する声もあった。

最初のケースは、七〇年代によくみかけたタイプだ。知識の吸収のために講座にきたが、今の生活には納得していて、他人の言説によって揺らいだりしない「現状満足」型といえる。②は、専業主婦の経済的基盤の不安定さを理解していて、打つ手を考えたいと思っているが、

社会構造に行く手を阻まれ、講座への出席を思い立ったという「現状打破」型だ。

多かつたのは、実は、最後のタイプである。一見、①に似ているが、③の特徴は、高学歴の女性が多く、今の自分を不満に思っている点だ。だから、他人に自分の価値を認めてもらうことで心の安定を得たいと感じて講座に出向く。こうした女性たちの夫は、経済力がそこそこあるため、夫の経済的庇護からは抜け出しにくい。「自力で何かをするのは大変だから今の位置は守りたいが、自力で何かできる人として認めてほしい」（「わいふ」編集長の田中喜美子さん）気持ち強い。この二つの欲求の間でいられ、認められない周囲に怒りをぶつけることになる。

● 「企業の嫁」への転化

こうした「不機嫌派」の台頭の理由は、いくつか考えられる。

先ほど述べたように、七〇年代まで、「専業主婦と勤め人の夫」のカップルは、「欧米型近代家族の理想」実現の旗手でもあった。言いかえれば、「嫁」のアンペイドワークを「不当に搾取」する戦前の「封建的な家」を颯爽と否定する正義の味方だったのだ。

子どものころレースのピアノカバーや「手作りおやつ」をあれほど清潔に感じたのは、それらが、雑然とした店先でアンペイドワークを取りこまれていく「嫁」たちの人生へのアンチテーゼだったからかもしれない。

しかし、この「正義」は、その後、あつというまに会社中心主義に取りこまれていく。「専業主婦」は、円高不況の中で「企業戦士」として会社にすべての意識を集中する男性たちの後始末をする新卒のアンペイドワーカーとして、機能し始めたからだ。「企業の嫁」の誕生である。農村や商家の「嫁」と同様に、この人々は、前回引用した自民党の「日本型福祉社会」構想が示す公的福祉の肩代わりのための「社会の嫁」（評論家の樋口恵子さん）でもあった。

こうした行為が、それぞれの女性の「愛による自発性」ではなく、税制、年金制度の新設、企業の長時間労働や、違法な「結婚退職制」慣行を温存することによる既婚・子持ち女性の会社からの追い出しなど、アメとムチを駆使した誘導によって、装置として固定されたのが、八〇年代だった。

「新型の嫁」に転化した立場には、もはや、革新の夢も大義名分もない。にもかかわらず、社会に必要（というよりは、現状の維持に必要な機能として、これらの女性た

ちは政策担当者たちから期待され、ここからはずれば「悪い子」になる。そして、はずれなければ、一応は安楽な生活が保障される。

「妻たちの思秋期」の著者の齊藤茂男さんは、九九年に亡くなった。その数カ月前、斎藤さんと、赤提灯で隣合わせたとき、彼はさびしそうにいった。「最近、専業主婦の憂鬱なんてことがまた話題になっているんだね。僕は七〇年代末からずっと、この問題については警告してきたつもりなのに、世の中、ちつとも変わっていないかったんだね」。

そのとき、私はうまく答えられなかった。後になって、「主婦の憂鬱な心理については報道してきたかもしれないが、主婦を憂鬱な場所に固定する制度の強化については、メディアは目をそむけてきたのだ」と思った。八〇年代後半には、メディアの男性たち自身も、「勤め人」の一人として、配偶者特別控除や第三号被保険者などによって利益を得る存在に転化していたからだ。

一方で、こうした政策の恩恵をこうむれないどころか、むしろ被害感を抱く層の男女は徐々に数を増し、装置としての主婦への風当たりは強まっていく。これが「不機嫌」を一段と増幅するのだが、その経過は次回に譲ろう。

（たけのぶ・みえこ 新聞記者）

「男女共同参画」を 後ろ楯に

木村 民子

議員となつてうれし恥ずかしの頃、99年6月に「男女共同参画社会基本法」が成立した。「おつ、これは強い味方が現れた」と私は、内心密かにほくそ笑んだ。私の初質問の番ではなかったけれど、はじめての議会で、同じ会派の代表質問に早速これを取り込んだ。

Q 「男女共同参画社会基本法」が成立し、東京都では条例制定の準備を始めている。区では条例化しないのか」

A 理事者（行政側をこう呼ぶ）「区

では、都の条例を待つて『女性行動計画』の見直しを考えており、それで十分と認識しており、条例化はしない」

これは、いきなりジャブを食らったようなものだった。「基本法」には行動計画の策定を市町村に義務づけているだけなので、こう答弁されたら、条例制定を持ち出すのがこれからは困難になる。勇み足だった。ここは「基本法」に対する区の見解や取組をただすだけにとどめておき、その答弁によつては、今後条例制定しないことを批判できたのに……。

かように、議会や委員会での質問は理事者側との攻防戦だということ、身にしみて味わうことになった。

しかし、手をあげるだけでも、ドキドキ。指されても指されなくてもハラハラ。質問はしたものの頭の中は真っ白で、理事者が何を答えてい

るのか、さっぱりわからず、「はい、そうですか」と言つて座つてしまふと、「これ、なんですか、質問ではだめ」と先輩議員から叱られる。回りを見回せば、背広背広背広。なんと地味な色合いか。理事者も部課長級は女性が一人か二人。女性議員は私だけという委員会もある。そこで、清掃事業やリサイクルの問題を扱つたり、子育て支援や介護保険を審議するのだから、「私がいなかったら、どうなるの」と思いつつも、旧人たちと新人。封建オヤジたちとフェミオバサン。多勢に無勢。私は歯ぎしりの連続なのだった。

しかし、「基本法」を「絵に描いた餅」にしないためにも、これを使いこなさなくてはと思つていた矢先、わが区の女性センターの企画で「議員と語る」という懇談会が催された。これは、各党から2名ずつの議員が、

「基本法」や「女性問題」について意見を述べるという趣旨だったが、男性議員たちの言うことにや、「いやー、僕は女兄弟の中で育ったから、十分女性の強さは知っていますよ」「うちでは女房が怖くて、ぼくは結構皿洗いもやるし……」「僕は女性を大事にしてますよ」といった類いの発言が少なくなかった。

女性たちからは失笑、苦笑がもれるほど。基本法の理解にもほど遠い。私はいつしか、居並ぶ女性たちというよりは、男性議員たちに説明しているような錯覚に捕らわれた。実際、その会が終わったら、ある男性議員が「あなたの説明を聞いてよくわかったよ」とお世辞ともつかぬ言葉をかけてきた。「情けない、これはまず議員教育からしなければ」と、私はため息が出る思いだった。

そこで、六月の議会での私の初質

問は徹底的に「基本法」を軸に、フエミニズムの視点から、介護保険、子育て支援、小中学校でのジェンダー教育、職員たちへのジェンダー研修、女性に対する暴力、婦人相談、女性センターの名称などをとりあげた。ことに折から介護保険の見直しで批判の強い「家族介護慰労金」の現金給付に関しては、「介護基本法」の理念である「介護の社会化」にも矛盾し、「基本法」の第6条にある「家族を構成する男女が」「家族の介護」を相互の協力のもと責任を果たすことを規定しているのだから、逆に女性の介護負担を増大させるような施策はやるべきではないと訴えた。また、「区歌」にこめられている女性蔑視的な表現も問題にした。

私の質問だけで、ゆうに45分もかかり、理事者側の答弁を加えると75分間も「男女共同参画」やら「ジェンダー」などの言葉が議場に飛びか

った。初めは野次を飛ばしていた男性議員たちも、あきれたのか、居眠りを始めたのか、次第におとなしくなっていた。私は、緊張してのどがカラカラだったけれど、落ち着くと共に妙な快感を覚えた。

私の応援団が数人傍聴に来てくれたのが心強く、中には、熱心に耳を傾けている若手男性議員や職員もいた。「先生って（呼ぶなって）コワイんだね」と、感想をもらす議員がいるかと思うと、「この間DV（ドメスティック・バイオレンス）に関する関係所轄の会議があつたので、資料ご覧になりますか」と言いにくてくれる職員も現れた。

そうなんだ。めげてはいられない。口に出していかなければ、何事も始まらない。以来、私が口を開けば、「男女共同参画でしょ」と先回りして言われるほどになった。

（きむら・たみこ 区議会議員）

ひげのおばさん 子育て日記 ④

中畝 常雄



批評より褒め言葉を

妻とは、大学で四年間、同じアトリエで絵を描き、批評し合ってきた。その延長で、結婚してからも、頼まれないのに批評していた。「この色が全体の邪魔をしているよ」、「この形は良くないからもっとデッサンしたほうがいいんじゃない」、「この部分はなにも描かない方がすっきりするんじゃない」とか。

言われてなるほどそうかと思うこともあるが、自分だつて分かっているのにうるさいと思うこともある。旨く描けたと思つているところを批判されたりすると、結構傷つき、怒つてしまう。それは、そちらの感覚なんだから、自分のとは違うぞ。言われた通りにしていたら自分の絵じゃなくなつちゃう。

せっかくなつてあげたのにと片方は思い、もう片方は余計なお世話と思う。そこにこだわっていると、喧嘩にまで発展する。絵は良くならない上に、骨折り損だ。

しかし欠点はなかなか直らない。直すのにとても時間がかかる。たとえ直つたとしても、長所も消えてつまらない絵になつては意味がない。長所と欠点は背中合わせだ。それより、得意な表現に磨きをかけて描きあげた方

が、絵は魅力的になるし描いていて楽しい。やつとそう気がついて、互いに良いところを褒めて応援するようになった。「こういう表現旨いよね」、「ここのいい色出てるじゃない」とか。褒められると悪い気はしない。嬉しいし元気も出る。何と言っても喧嘩しないですむ。

では家事と育児ではどうか。我が家の家事は、たいいてい妻のやり方で進めている。部屋がどのくらい汚れたら掃除をするか、どのくらい散らかると片付けるか、洗濯物はどのようにたたむか。長年のうちに慣らされたが、未だに私の感覚とは擦れ違うものもある。料理は好きだが、掃除には興味が持てない。

「こんなに汚いのには掃除しないでよく平気ね」と文句を言われる。言われてもやはり変わらない。そんなに気になるのならご自分でやっていただきたい。しかし妻はあくまで私がやるべきと思っている。やらなとは言わなないが、今はまだやりたくないのである。こちらのペースを尊重してほしい。

家事や育児も芸術作品と一緒に考えられないだろうか。それぞれのやり方があり、出来上がりもまちまちだが、最低必要ながやあってあれば作品として尊重しよう。「苦手を克服せよ」と攻め立てるのやめよう。争いの元である。「苦手なのに良くやった」と褒めればいいのである。

時々皮肉が混じっていても仕方がない。それは無視することにしよう。お世辞も煽てもおおいにけっこう。お世辞も言うし、煽てにも乗ろう。家事も育児も大したことではない。適当に片付けて、子どもと遊んだり、絵を描いていた。家族が機嫌よく、よい関係でいるほうがずっと大切だと思う。

妻のいいぶん

だからくさいてい必要なソージをしてって言うてるん
でしょ。私だつて、家事も育児も、全然やりたくないこ
としよつちゆうあるもん。大したことでないけど、大変
なことなのよ、毎日のことつて。そつちのやり方でいい
からトイレソージしてよ！ 芸術的でもなんでもいいか
ら。ほめてあげるからさー。オフロのタイルも汚いヨ
ー！ おーイヤダ。 治子

●中畝常雄・個展のお知らせ

郷里の沼津で左記の通り個展を開催します。お近くの方、お立ち寄りいただければ幸いです。

会期 6月29日(木)～7月4日(火)

午前10時～午後7時(最終日は午後5時まで)

会場

ギャラリーほさか(電話0559-5117332)
(沼津市大手町5-2-9 沼津駅より徒歩5分)

見ることと食べること

松本 一郎

子どもの頃、別に深い思想があったわけでもなく、ただ単純に学校が嫌いだった。先生と呼ばれる人もただの人なのだ、と思ったのはいつのことなのだろうか？ あこがれの対象にならなかつたし、一緒にいて楽しいわけでもないのに、毎日顔を合わせなければならぬ人というのは、なかなかやつつかいだ。そして、その先生が、昨日の延長で今日がある、そして明日も同じだと考える人だったから、なかなかつら

いものがあった。子どもの時つて、毎日が目まぐるしく変わり、自分の考え方も短い時間の中で変わっていくし、変わりたい願望の固まりなのだから、「昨日のことを持ち出さないでよ」と何度思ったことか。

授業中は先生の話を静かに聞きましよう。授業中は立ち歩いてはいけません。授業中はモノを食べてはいけません。学校というのは集団の活動を学ぶところだから、自分勝手な行動はやめましよう。先生の指示に従いましよう……。そうやって、慣らされて自分の事を自分で決められなくなってしまうところだったのだなあと、学校に行かなくなつてからやつと気づいた。

今、絵を教えているが、伝えたいことを知っている教える側と、知りたくてウズウズしている生徒さん側という図式は、小学校の「教える／学ぶ」関係に似ているが、せっかく、今までの常識からは外れているキミ子方式を教えているのだから、自分が不快に思っ

たことはやらないというスタンスでいる。

先日、かれこれ十年くらい絵を教えるに行っている、東京都R市にある知的障害者更正施設（すごい名称だな）「あさがお」に行った時（イチゴ）を描いた。イチゴも、成長するように、一点から部分を完成させていく。まず最初はイチゴのヘタ一枚を描くところからスタートだ。

今回参加してくれた四名の中に、一倍からだの大きいタカシさんがいた。タカシさんは視定の定まらない視線で宙を見つめ、夢見心地の中に居るように見えた。目の前の画用紙の上には、イチゴ一粒がおかれ、そのイチゴを見ながら絵を描き進める。ヘタ一枚から描く説明をしたが、わかっているのか、いないのか、表情一つ変えずに首をゆつくり左右に降りながら、宙を見ている。「言葉だけの説明ではなかなか難しいよね」と、彼の手にボクの手を添えて、一緒に色をつくり始め

る。その時だつて気をつけていないと、パレットを見ずに視線がどっかに行つてしまう。「この一枚のヘタの色を作るんだよ」。パレットの中の、赤、青、黄色、白の4つの色から、どの色をまず最初に筆先につけるのか、何度も問いかける。それでも、首を左右にふりながら、宙を見つめるタカシさん。何度も呼びかけ、イチゴのヘタの葉一枚を指さし、色をつくる説明をする。色をつくらぬことには描くところまで進まないのだ。

一人の人だけについているわけにもいかないで、他の三人にも手伝いながら授業は進んでいく。そして、また、タカシさんのところに戻つて、ボクがイチゴを指さし「この色をつくらうよ」と声をかけると、急に今までとは違つて、顔つきでイチゴをしつかりと見つめて、イチゴを指さすように手を伸ばした。「やった。やっとわかつてもらえた」。言葉が理解できないのだらう、とか、タカシさんの能力のせいにして、

教えることをあきらめなくてよかつたと思つた。やつとボクの思いが通じたと思つた。「そうそう、そのイチゴのヘタの色を……」と話している途中、イチゴにのびた彼の手は、そのモデルを、ヒョイツとつまみ、なんの疑いもなく口の中に入れてしまった。モデルのイチゴを食べてしまったのだ。それも、後からヘタだけはちゃんと出し、机の上におく。その一連の流れに、呆気にとられ見守つた後、さて、どうするかと猛スピードで考えた。(授業中、モノを食べてはいけません)。そんなことを教えるためにボクは授業をしているのではない。イチゴがうまく描けて、描いた本人が喜んでもらうために絵を教えているのだと思つた。だから、何事もなかつたように、タカシさんの前に新しいイチゴを置き「このヘタの色をね……」と説明を続けた。すると、お礼とばかりに一枚のヘタの葉を描き、また口の中へ。そしてボクが新しいイチゴを置き、隣のヘタの葉を描

き、食べ、少し描いては食べ、と部分を描いていったら、いつの間にか一粒のイチゴが描けた。そして一パック半のイチゴがなくなつた。

そのあと、タカシさんは黒板に貼つた自分の絵を見ながらニコニコしている。さっきの無表情の顔とは大違いだ。そして、彼の様子を見て、絵を描くことだけを優先してよかつたと思つた。

(絵を描く) つていうだけでも、描く側がいろんな思いで参加する。当たり前になにか新しい発見をすることが多い。その発見に喜ぶ人もいれば、絵が苦手と思ひこんでいた自分が、自分で納得できる絵が描けて、自分を惚れ直す人もいるだらう。どう受けとめるかはボクが考えることではないのだ。タカシさんもきつと、見るだけではなく味わうという充実感の中で絵を描いていたのだらう。なかなか笑顔がステキだった。

(まつもと・いちろう／キミ子方式・講師)

番外編④

男は必需品ではない

河村ふみ

先日、『エリン・プロコピッチ』を観てきました。ジュリア・ロバーツ主演の。ジュリア・ロバーツには最近感謝しています。それほど彼女が好きなのではなかったのですが、だって、あの『プリティ・ウーマン』は、それなりに楽しませてはくれたけれど、自称フェミニストのわたくしとしては、ちよつとねー……。『ベスト・フレンズ・ウエディング』だって、何か嫌な役をやったし、私の好きな映画『マグノリアの花たち』でも、あの娘役はジュリア・ロバーツだったの!?と後で知るくらい、印象薄かったし。まあ、シャーリー・マクレーンやサリー・フィールドなど大御所が共演者では目立たないのも仕方ないかもしれません。『ベスト・フレンズ・メモリー』と言えば、あんな存在感の薄い女どごがいいの?と思つたキヤメロン・ディアスが、『普通じゃない』や『メリーに首つたけ』ではなかなかだったから、役者はやつぱりどんな映画に出るかで左右されますね。

これ以上書いていると、武田さんや水田さんのお株

をとるといけないから(ンナワケないか)、ATの話に入りましょう。

で、『エリン・プロコピッチ』ですが、私が映画の中で一番気に入ったセリフは、おつと、その前に、なぜ最近ジュリア・ロバーツに感謝しているのかというと、あのフェミニストには不評だった映画の第二弾、『プリティ・ブライド』。映画の内容はこれまた、「ちよつとねー」なのですが、あれは、ATには使えるのです。

リチャード・ギア演ずるアイクは、新聞のコラムニスト。ある日、行きつけのバーで酔っ払いから聞いたマギー(ジ・ロバーツ)の話(7、8回結婚式から逃走している、男を食い物にする悪女だ)をそのまま記事にした。怒つたマギーが編集長に嘘を書いたアイクを首にしてくれと抗議文を出し、アイクは首になってしまふ。そこで、裏をとつて名誉挽回しよう、アイクがマギーの住む町に取材にやってくるというお話。事實は、結婚式の逃走劇は3回で、今は4度目の結婚式を間近に控えている。悪女どころか、町の人気者で、町の人たちは、今度もマギーが結婚式から逃げ出すかどうか賭けたりして楽しんでいる。マギーが結婚式から逃げ出すのは、相手の好みに自分をあわせて付き合っ

てきたので、いざ、それがずっと続くことになるかと思うと怖くなってしまいうからだ。

アイクは、3人の男に会って、それぞれに「マギーの好きな卵料理は何か」と聞く。1番目の男は卵焼き、2番目の男はスクランブルエッグ、3番目はポーチドエッグ、4番目は自身のオムレツだと答える。アイクはマギーに言う。「君は自分がない。だから自分の好きな卵料理さえ分からないんだ」と。

マギーは、ちよつとアートな（へんてこな）照明器具を作るのが趣味で、いつかはそれで成功したいと思つてはいるのですが、父親は、妻を亡くしてから酒浸りで、マギーはその父親の世話と店（金物屋）を手伝うために工芸大学を中退しています。ここにも自分のことは後回しにして人（親）のために生きようとしていくマギーの性向が表れています。

と、こういうお話なのですが、私は、この話をATの講座の導入として使つてみることを思いつき、50人程の受講生の前で話をしました。そうしたら、若い人たちに受けたらしく、そのお陰で次の仕事が舞い込んだのです（もちろん、次のときには、もうその話はしません。次のウケネタを用意していきました。同じ話をするのは私自身があきてしまいますから）。

ジュリア・ロバーツが好きになったのは、映画だけでなく、イングリッド・ジャーマナルに彼女のインタビュー記事が載つていて、その中で、『ペリカン文書』のデンゼル・ワシントンについて聞かれて、「ああ、彼は最高！ 私はあの映画の中でデンゼル・ワシントンと絶対キスをしたかったの」「でも、あの映画の中では、あなたは恋人を亡くしたばかりで、それは無理だったのでは？」とインタビュアー。「そうなの、まさにそれがデンゼルが主張したことなんだけど、それでも私は彼とキスしたかったの」と言つて観客を笑わせる。他にも笑えるところがたくさん。ユーモアがあつて、率直（主張的）な彼女がとても好きになつてしまつたわけです。

それで、『エリン・ブロコピッチ』ですが、今度は映画の内容にも大満足。ジュリア・ロバーツは超カッコよく、途中、「ヤツパ目がきれいだよなー」と今までの不評はどこへやら、ほればれしてしまいました。エリンは2度の離婚経験者、子どもは3人いて、まだ下は乳飲み子。失業中で仕事を探しているが、なかなか見つからず、預金高16ドルという苦境に陥つている。なんやかやあつて、やつと仕事にありつくが、ある日、ベビーシッターに逃げられ、苦境に立たされる。

そこにとりなりのバイク乗りの兄ちゃん（ヒッピー風）が、助っ人を買って出る。いつの間にか、子どもたちの父親的存在になり、彼女の伴侶的存在になってしまふ。彼女の方は仕事上でだんだん重要な役割を担っていき、家族へ割く時間がぐつと少なくなる、それに嫌気がさしたのか、ある日、その男が家を出て行くという場面で、男が、

「オレはどうなるんだ？」

「どうでもいいわ」

「……」(この時の男の表情つたら)

「私は、今まで2度も結婚して、男のいうなりに男に合わせてきた、その結果がこうだ(子ども3人置いて男は逃げてしまったという意味)。男なんて役に立たない。今、初めて私はやりがいのある仕事を得て、人に尊敬されるようになった、それを捨てるつもりはないわ」と。

セリフは正確ではないですが、まあ、このようなことを言う場面があるわけです。

「どうでもいいわ」というところが、最高！

多少やせ我慢的な感じでもないではないですが、やせ我慢だっというじゃないですか、このセリフをキャシィ・ベイツが言うとき、そのまんまなんだろうけれど、

ジュリア・ロバーツが言うところに、安心しては聞いたらいけないけど、それだけに頑張つてよねと応援したくなっちゃう何かがあるのだ。もちろん、これは私の思い入れかもしれないのだけれど。

で、今回、私が言いたかったのは、私たち女性は、今まで人間関係に重きを置き過ぎてきたのではないかということなのです。

夫婦関係がうまくいかなくなって相談に来るのはほとんどが女性です。相手の男は何をやっているかという、仕事に逃げている。

私もかつて専業主婦をやっていた頃、夫と喧嘩すると、一日中そのことばかりが気になって、頭から離れませんでした。でも、仕事をするようになって、朝、喧嘩して出て来ても、目の前の仕事に没頭しているうちに、それほど気にならなくなっている自分に気づくようになりました。ああ、男はこうやって、多少家で嫌なことがあっても、多少どころか、家庭崩壊しているような状態でも、女性がそれに心を痛めるほど、ダメージを受けないのは、他にやることあるから、他の世界を持つているからなのだと分かりました。

女性は関係性に価値を置く性で、男はそうでないから、女と男の溝は埋まらないのだという人がいますが、

それは言える面も確かにあるのです。ただ、だから仕方ないというのではなくて、だったら、女も関係性に価値を置く比重をちよつと減らしてみたらどうだろうかと思つたわけです。

私たちは、一日をいろんなことをして過ごしているわけで、人間関係だけがすべてではない。

パートナーとの関係がうまくいかないとき、ひとりていくら努力したって、相手があることなのだから、あせつてもどうにもならないこともあります。そんなときは、ちよつとそこから離れて、好きなことをしたり、他の人との関係を楽しんだりしてみる。ダメな部分をいじくり回すのではなく、ましな部分に目を向け、そこで楽しむことによつて、元気を回復していけば、苦手な部分に対処する力も湧いてくるだろうと思つています。

パートナーとの関係だけでなく、職場での人間関係だつてそうです。職場での対人関係がうまくいかないという相談はすごく多いです。これは推測にしすぎませんが、職場の対人関係がうまくいなくて相談に来る男女の比率は多分女性の方が圧倒的に多いだろうと思います。

「アンタ、職場に何しに行つてるの？」と、言いた

くなるくらい、その人の中で人間関係だけが大きなウエイトを領めてしまつていいる人がいます。

確かに、職場は気持ちよく働けるにこしたことはないのですが、それにばかりとらわれているから、仕事上のミスも増え、また評価が下がるという悪循環に陥つている場合もあります。こんなときは、その対処を一所懸命考える前に、ちよつとそこから身をずらしてみることでも有効なのではないでしょうか。

以前、とんねるずの番組で、集団デートをして相手を見つける番組がありましたよね。あれで、プロフィールを紹介するとき、「彼女（彼女）いない、歴〇年」と必ず出るのですが、あれは、問題だよなーと私は思つていました。彼や彼女がいることが当たり前で、いないのはおかしいと刷り込まれているようなものからです。

男は必需品ではありません。いい男（女）ならいいもいけど、そうでないならいなくなつた方がいいのです。『エリン・ブロッピッチ』に見習つて、「どうでもいいわ」とやせ我慢でもいいからつぶやいてみては。

（かわむら・ふみ フェミックス・カウンセラー）



終 幕 (16)

〈アジアを着る その2〉

水田宗子

アジアの女性たちの衣服は、ジェンダーとナシヨナリズムの関係について多くのことを語っている。インドシナでは、植民地統治の手先となるエリート層の養成が本国の教育機関への留学を通して行われたので、近代化とは西欧化であり、ナシヨナリズムと対立する概念であった。西欧仕込みのエリートたちは、母国語を使うよりは英語やフランス語を話し、西欧の紳士や婦人と同じ服装をし、それが近代化の指標であった。

近代化とは西欧文化への追従であった。自分たちの国を後進国と位置づけ、その文化を西欧より劣ったものとして、国民が未開発で文化程度の低い土着文化から少しでも早く抜け出すように教育するのが、彼らエリート層の任務であった。

したがって、植民地からの解放に目覚めた西欧育ちのエリート層のナシヨナリズムは、自分たちがいったんは投げ捨てたものを拾い上げ、それを身につけるといふ現象となって現れる。スマートにスーツを着こなしていた、イギ

リス帰りの弁護士マハトマ・ガンジーの、独立運動へのプロセスを通しての変貌は、アジアにおける反西欧、近代のあり方の一つのよい例だろう。ガンジーは西欧の服と靴を脱ぎ捨てたばかりでなく、輸入の木綿製品をさえ避けて、糸から紡ぐことを通して、インドの文化と生活様式への回帰、というよりはもつと意識的なその再評価と再選択を意思表示したのである。その目に見える身体のある方、衣服の選び方が、ガンジーの目ざしたインド独立の思想と生活と心を象徴する。

しかし、近代化と反近代としてのナシヨナリズム（日本モデルのような、近代を目ざすナシヨナリズムがむしろ主流であったが）と衣服の問題は単純ではない。そこにジェンダーが加わると、ことはさらに複雑である。ガンジーが身をもつて示したような独立への意思表示は、女性の場合はどうだろうか。インドの女性たちは、ガンジーのように、伝統的な衣服を一度は脱ぎ捨てるといふ経験を持たなかった。だから、いったん捨てたそれを自ら選んで意図的に再度身につけるといふ、ナシヨナリズムへの意識的で自主的な契機がなかった。彼女たちはそうした経験を持たないままに、伝統的なサリーを着ることを求められてきた。男性の服装の近代化に対して、女性に求められたのは伝統的な女性観であり、ジェンダー文化であり、それを体現するものとしての民族衣装であった。

サリーそのものではなく、サリーを着た女性の身体が、伝統文化、国民文化の象徴とされているのであり、それは女性の記号化による男性からの差異化や女性の身体の抑圧であるばかりか、女性の身体とその衣装という、目に見えるもの、形に、意味を付加するジェンダー文化の端的なありようなのである。インドの衣を身にまとうて瘦せた膝を立て、糸繰り道具を手でまわしていたガンジーに、このことをどう考えていたか、一度聞いてみたい気がする。

女性の身体と衣装というこのことは、伝統服を着てはいけないという、逆のメッセージにも同じようにあてはまる。一九四九年以後の「新中国」での女性のチャイナドレスの禁止、人民服の強制（それも明るい色の生地は禁止）や化粧や装飾品を身につけることへの禁止と批判は、一見女らしさを強調せず、つまり、女というジェンダーを前面に出さずに男女平等を推奨し、推進する方策のように見える。しかし、それは実際には、ナシヨナリズムと社会主義建設という国策遂行のための女性労働力の動員という目的による、女性の身体をコントロールしようとするジ

エンダー支配であり、ジェンダー文化の強化にほかならなかった。

一 先年訪ねたネパールで、どんなに遠くからでも男女の区別がすぐにつく、個人よりもジェンダーへの分類が先に立つ文化に、どこかで違和感をおぼえたことは前にも書いたが、一九七〇年代のはじめに初めて訪ねた中国では、紺や灰色一色の人民服を着た女性たちに、気の毒なような感情を抱いたのだった。それはどちらも、一目瞭然な、身体的な特徴に意味を付与することによるジェンダー操作であり、私のそれへの感情は、ジェンダーによる個人の消去や隠ぺいという、その操作への反発や嫌悪だったのだった。

しかし、考えてみると、人類はなんと長い間、性差を目に見える明確な記号とすることによってのみ、ジェンダーを二つしかない性差として制度化し、文化としてきたことだろうか。

日本の着物に関して言えば、江戸時代には、髪型、化粧とともに、着物という衣服が実に多様に目に見える記号として女性を規制していた。男性もまたそうだったが、それは特に女性に著しかった。同じ着物でも、絹を着られる階級と着てはいけない階級があり、身分や階層、年齢、職業、さらには季節、着る時や機会や場所によるさまざまな決まり事、織りや色や模様や紋の有無による格付けなどと、それらの「ご法度」による女性の身体の外觀を通しての管理と支配は、瑣末なまでに徹底していた。

中国での悪名高い纏足は、直接的な身体への変容を目に見える記号とする極端な例だが、それとて根本的には、髪型や化粧（お歯黒をふくむ）や衣服によって女性を類型化し、分類して、ジェンダーに閉じ込めるための文化的装置と本質的には変わらないのである。髪型や化粧や衣服という、身体を覆い、飾るものは、単に身体の表層に付けられる文化的な装飾物ではなく、身体そのものと内面を規制し、規定し、変形し、それによって身体を価値付けし、意味付けする方法なのである。

今、私たちはどんな衣服でも比較的自由に身につけることができるが、それでも和服を着ようとすれば、わずらわしい決まり事や規則からまったく自由に和服を着るというわけにはなかなかいかない。伝統的な日本女性の衣服は、ジェンダー文化でがんじがらめになったまま、働く女性の日常生活から離れて、パーティ用の、祭りの場の衣装になってしまっている。

（みずた・のりこ／日米文学比較・フェミニズム文学批評）

●編集者による本の紹介●

あなたが知らない危機とそのサバイバル術

「専業主婦」で

幸福になる方法

発行・洋泉社

12000円 2000年5月刊

船矢 佳子

フリーランスライター・編集者

昨年の暮れあたりからこの春まで、私は標題のムック（雑誌風の単行本で複数の書き手が集まって1冊仕上げるスタイルの本）本に、編集と書き手の一人として携わった。本を読んでくれた人たちからは「タイトルだけ見ると主婦を礼賛しているようだけど、読んでみると実際は専業主婦（以下、主婦）のリスクを指摘している本だね。そのうえで応援している感じ」という感想を数多く頂戴した。

実は今回そのような形になったのにはいきさつがある。もともとこの本の

企画を出したのは版元の年配の男性幹部。「これだけ多くの女性たちが結婚後主婦を選んでいるのだから、きつと幸せに違いない。楽しさやメリットを強調して、主婦たちを応援する本を作ってくれ」という発想から彼はこの企画を出したのだ。よく主婦はサラリーマンの夫とセットで発達してきたというけれど、年配の男性から主婦物の企画が出されるあたり、その通りだとしみじみ思った。もし本当にこの路線で作ったら肝心の主婦からは絶対に相手にされないだろう。実際担当することになった社内唯一の女性編集者Aさんが「私はシングルで主婦の気持ちはわからないけれど、でも能天気にはわが楽しい」という本を作るのは納得いかない」と言うので、一緒に担当する主婦経験者の私は「主婦は情報から隔絶されるし、そんなにおいしい境遇ではない。絶対、主婦のリスクから目をそらしてはいけない」と言った。でもリスクばかり強調すると面白くない

し、希望がない。だいいち企画を出した男性幹部のチエックが通りそうになり。そこでターゲットをまだ若い20〜30代の主婦に絞り、「リスクは高いですよ。でもまだ若いんだし、あなたたちには時間がある。その時間的余裕や今ある主婦のメリットを生かしてがんばれば、これから先いくらでもリスクを回避でき、本当の勝ち組主婦になれますよ」というトーンでいくことになった。これならまあ、「主婦よ、働け！」とダイレクトに主婦の生き方を否定するわけではないので、年配の男性からみて反感も買わず、主婦からみても納得できるだろう。この本の「主婦のリスクを指摘しつつ、応援する方法を提示する」というコンセプトはこうして導き出されたのである。

それにしても今回の取材を通して、主婦というのは身近に大勢サンプルがいるにも関わらず、理解されにくい存在だということをつくづく感じた。たいていの人が、まず「主婦は楽」「自

ら選んでいるので満足しているはず」と思っている。現状に満足していない主婦は大勢いるのに、どうしてこんなに実態が見えにくいのだろうか？取材で会った多くの主婦とその経験者、自身の体験から考えていくと、その秘密は主婦の仕事が「人との出会いが少ない」点にあるのではないか。私は夫の海外赴任で主婦になったとき、「働いているときにはできなかったさまざまな習い事や経験をしよう」とかなり前向きにその環境を考え、実践もしたクチだった。だが、なぜか全然満足できなかったのである。私はフリーでライターをやっていたから、家が活動の中心である点では主婦と同じはずだった。仕事の代わりに習い事が入っただけのはずなのに、満足できない自分が不思議で仕方なかった。そこでいろいろ考えるに仕事をしているときと、主婦だけやっているときの大きな違いは「人との出会いがないこと」だと気づいた。私は確かに自宅を拠点に一人で

仕事をしていたが、出版社の人、カメラマン、デザイナー、印刷屋さんなど本当は多くの人と日々関わっていたのである。仕事というのは、イコール他者と関わることなので、仕事をしていると自然と人の輪が広がっていく。一方、主婦の場合はどうか。主婦業そのものは「人と接触しなくてもできてしまう仕事」で、日常の業務、つまり家事をしているだけではただの一人も出会いはない。主婦で顔の広い人はみな「外に」に出て、それを手に入れていくのだ。

仕事を辞めてしまうことの本当のデメリットは、お金がないこと以上に「人との出会い」が絶たれることだと思う。なぜなら人との交流は多くのメリットをもたらしてくれるから。あらゆる情報、知識、おいしい話、有り難い話はみな人を介して入ってくるもので、そのうまみはお金とは比較にならないほど大きい。主婦になって人との出会いが少なくなるというのは、そう

いううまみをごっそり捨てることになるのである。同時に人との交流は自分の気持ち、要求を他人に伝える働きもする。逆に言えば主婦が妙に幸せと誤解されているのには、人との出会い・交流が少ないために、主婦の気持ちや実態が他の人たちに伝わらないからではないか。彼女たちの声が全然届かないから、他の人はみな漠然と「主婦は楽」とか「幸せなんだろうな」と思ってしまう。もつと言うとうと日本で主婦業が評価されない理由もそこにあると思う。女性が主婦になつて他者との関係を絶つてしまうことで、主婦業の大切さが主婦以外の層に伝わらないのである。

今回の本は男から見た都合の良い主婦ではなく、人として本当に幸福な主婦になるために作った本だ。リスクを克服する強い主婦を増やし、働く女と団結し、女のパワーを見せつけたいものだ。

神奈川 田中勢津子

We から、皆さんのエネルギー、感じます。私は、昨年十月以来、目の網膜にむくみが出てしまい、物はゆるやかにゆがんで見え、うすぼやけた立体感のない景色の中でくらししていますが、物の見え方が曖昧でも生活には支障なく、シャープに見えないだけ、といった感じでした。

こういう見え方の中で感じたことなのですが、私の目には、たぶんまっすぐであろう、まっすぐのもの、例えば電柱とかビルとか窓枠とかが、曲線的に見える。いやいや、これは曲がつてるはずないから、こう見えてはいても実はまっすぐなのだ、と理屈が頭の中をぐるぐるめぐり、実感は伴わないけど、わかっただつもりになる。見る、考える、見えるものは一体どうあるべきかと、もう一度考え、頭の中だけで納得しようとすから疲れることがある。ぼやっと

しているものは、必要な時以外、ぼやっとしていてもらうのに限る。私の頭が疲れないから。もしかしたら、本当に、たわんだ窓枠だつたり、電柱だつたり、かもしれないのに。常識〃にとらわれているだけかもしれないのに。〃世の中の常識〃(ジェンダーのことなんかも含めて)も、案外そんなもんじゃないかと思ひました。自分が思い込んで〃ものさし〃で計ろうとして、そこにおしこめて、安心して。実は、常識というものさしでは計りきれない実際があるかもしれない、見えたつもりになつていただけかもしれないと。目を患つてわかつたことの第一は「目に見えるものが全てでない」ということ。もつと言えは、「目に見えていても、ナンボのものか」ということ。目に映るうわつづらのカタチのむこうにある、存在そのものを感じとる心こそが大切であることだと。

一昨日、気おけない友人としや

べつていたら、彼女いわく、「私、うつ状態でさあ、うつになるとどんなふうになるのか、じつくり味わつてやれと思つたらね、何だかラクになつたのよ」と。私も「目が不便なんだけど、不便な生活じゃなきゃわからないことは、不便な生活になつてみて初めてわかつたよ」といった具合でした。自分の身体の様子を味わう私たちつて、何て、自分のことが好きで、自分に責任のある人たちなのでしよう、チャランポランな会話を交わしつづつ乾杯しました。病気に耳を傾けることつて、ハイ、大切です。■

兵庫 中村 英之

6月号の『We』とつてもよかつたです。女性にとつて働き続けるか子どもかという選択はナンセンスとわかつていても、社会の女性に対する攻撃はすさまじい。特に女性が女性の足をひっぱるような言動はやり

されない（もちろんその背後に「男」社会があるのだが）。

夫婦別姓運動をともにした仲間たちは「事実婚」で二人とも公務員もしくは、大企業で子どもがいるか、ペーパー離婚から本離婚へ、今はシングルという人が多い。女性が働き続ける障害が「子ども」から「パートナー」に変わりつつある。男の意識は何年もの間にも変わっていないということか。私の職場でも、この人は結婚しないほうが社会に生きる女性のためにいいのではないかと思える男性は少なくない。■

鹿児島 川崎貴子

6月号で印象に残った記事は吉楽美奈子さんの「女性が生き生きと働くには？」です。私には4歳の子どもがいますが、勤務地が家から1時間以上かかり、毎朝、子どもが寝ている間に出勤しています。その子どもは保育園への送り迎えは私の母が

してくれているのですが、その母の人生を犠牲（？）にして、今の生活が成り立っているようなものです。もし母がいなかったら、どうなっているだろうかといつも考えてしまいます。でも、世の中には単親で子どもを育てている方はたくさんいらっしゃって、やはり、保育園がもつと充実するといいなあと思っているところですよ。

また、学丸果生さんの「二人目は産まないかもしれない症候群」も大変共感しました。専業主婦だった頃の私の気持ちと同じです。今も、周りの方から「まだ若いのだから、いい人がいたら再婚して、子どもを産んだら？」と言われたりもしますが、どんなに好きな人に出会ったとしても、なかなかそんな気持ちにはならないと思います。一人目のために、二人目を産もうなどとは考えたくありませんし、一人っ子でかわいそくだなんて思っています。

今、福島瑞穂さんの「結婚と家族」という本を読んでいます。戸籍制度などいろいろ考えさせられるものがあり、私自身の生き方を模索しているところですよ。

それから、送っていただいたブックナンバーをこの休日に少しだけ読みました。98年の8・9月号、特集テーマ「なぜ私たちはセックスをするのか!?」の中の鈴木水南子さんの「豊かな性」を探る前に」を読んだ、これまた、「目から鱗」状態になつてしまい、感動してしまいました。「なるほどー、こんな考え方もあるんだあ！」と単純に感心しました。また、再読してみようと思います。

『We』を読むたびに、視野が広がっていくような気がします。そして、なぜか、気が楽になることもあります。うれしい限りです。■

読者のひろばに、『We』の感想、ご意見、ご要望等、お寄せください。お待ちしております。（編集部）

ムササビフォーラム へのお誘い

ムササビに会いに行こう、京都へ。

古のまち、京都。そこには古いものを残し、新しい関係を築く様々な試みがなされています。今年のWeフォーラムはそんな京都を紹介しながら、We関西で用意できる新しい関係性を提案します。

まず、京都発。フォーラムテーマのムササビは、ムササビの棲む里山の保存運動を通じてまちと自然の豊かな関係の模索からのネーミングです。全体会議の梶田真章さんは浄土宗法然院貫主として、お寺が市民のコミュニティの場としてどんなことができるかと、ともすれば閉鎖的な仏教界の中にあって、さまざまな試みに挑戦してきています。境内でのコンサートや劇団公演。分科会でワークショップを開く障害者身体を前面に出した舞踏で知られる「劇団態変」も公演しました。法然院の裏に広がる森のムササビに是非会いに来てください。(もり)

ウナギの寝床で知られる京の町中には「町家」として庶民の家屋がさまざまな形で保存・再生されています。昔の家屋は使いにくい、住みにくいと思いがちですが、住む者、商う者にとって実はとても合理的だったのです。そのあたりの魅力をたっぷりと保存運動の方に紹介してもらいます。(まち)

そして、もりとまちとを有機的に結びつけ、どちらがどちらを荒らすのでなく共存していくコーディネートはやはり“ひと”の存在。法然院そばの森のセンターの方、京都に迎賓館は要らないと、無用・不要な施設にノーと言いつけている人たち。(ひと)

そして、“ひと”の延長でWeならではの、牽強付会の人選で、個性的な人たちを集めて分科会をそろえてみました。高齢社会、ドナーカードなどなど、明日の自分自身を哲学の里、京都から探求してみませんか。もちろん、手作業も家庭分科会もあります。

脱構築だとか、ディスコンストラクションだとか既成の枠組みから解放されてみよう、という精神活動がもてはやされたこともありましたが、けれど、私たち自身の解放は頭の中だけではなく、「こんなつながり方を模索している人がいるんだ」という具体的な出会い・運動の中でもたらされるものではないでしょうか。反目するのではなく、緩やかにつながり、そして互いを認めあうこと。違いを認識しながら一致点を探し出す。Weの基本は違いの中から関係性を広げていく試みであったはず。ならば、京都ムササビフォーラムは、「ひと、まち、もり」を通じて何かしらのヒントを私たちに与えてくれるでしょう。

さあ、ムササビのように勢いをつけて知らない世界へ飛び立ちませんか。最後になりましたが、関西セミナーハウスは、暮らしたくほどステキな施設です。イノシシ、サル、キジの訪問を能楽堂で待ってみては？

(We兵庫の会中村英之)

編集後記

●徹夜するとどうにも体力・気力の回復に著しく困難を感じるようになった。おまけに梅雨……湿気に弱い私にはダブルパンチである。気功の片山洋次郎さんの体癖分類によると私は6・8・10種の混合型である。6種はキムタクと同じ心といっても、感情の安定が悪いのでそうよくはない。時々ほーっとして意識がない。高速で危険を自覚して以来、遠乗りはしない次第である。片山さん曰く「6種はトランスしやすいからね」（トランスとは境界を超えること、つまり意識がぶつ飛ぶ）。8種は一見無愛想で恐いが、裏表がないので信用できる（と、私は思う。ちなみに河村さんも8種。そして10種は家にいられない、片づけができない、外で母性を発揮するタイプ。ちなみにフェミックスは10種の巣窟（私は違う、「一緒にするな」と河村さんが横で言っている）。と、自

分を肯定しあきらめるために、体癖の話になった次第である。（中村）●自慢ではないが、掃除と整理整頓ができない。若い時はなんとか直そうと空しい努力を重ねたが、自己嫌悪に陥るだけなのでやめた。見るもの聞くものすべてファジーに入りファジーに抜けていく自分の性格とワンセットになっているのだから仕方ないと受容するようになったら、楽になったが、ますます歯止めがきかなくなる。机の上が荷車状態になると空いた机に行つて広げるので「社長室を作つて閉じこめよう！」と言われている。（我が子も3人とも同じ理由で机が使えず宿題を腹這いになつてやつていた）。『片付けられない女たち』（WAVE出版）という新刊本が送られてきて驚いた。アメリカはすごい国。モノや時間の管理ができない、私の欠点を拡大したような症例にADD（注意欠陥障害）という病名をかぶせて薬も処方するという。人間、病氣だと

言われればあきらめがついて安心する場合もあるが、やつぱり「個性」と思つて開き直るほうがいいなあ。★7月8日〜9日、江ノ島のかながわ女性センターでカナダの護身術、WEN-DOWワークシヨップを開きます。一泊二日で一万五千元。相手からの攻撃を声、表情、身振り等あらゆるモノを使いかわします。何よりのエンパワメントになります。★7月15日曙橋の新宿区立女性情報センターで2時〜4時までテレサ（We2/3月号で紹介）の仮面とダンスのワークシヨップ。いずれも通訳つきです。お問合せ・お申込みはフェミックスまで、お早めに！★5月27日のシンポジウムを大急ぎでまとめました。「突貫工事」につきあつて、丁寧な原稿を朱入れして下さい。お三人に感謝。11月に続編を開催予定です。感想・ご意見をお寄せ下さい。みなさんのお知恵を拝借して具体的な戦略を立てていきたいと思つています。（稲邑）

くらしと教育をつなぐWe 2000年7月号 (84号/vol.9No.4) 2000年7月1日発行

定価……680円（本体価格648円＋税）（年間購読料7500円/送料共）

発行……femix・フェミックス

〒154-0001 東京都世田谷区池尻3-2-3サンケイグランドハイツ703

tel & fax 03-3424-3603 E-mail: femix@mail2.alpha-net.ne.jp

http://www3.alpha-net.ne.jp/users/femix/

富士銀行 池尻大橋支店 普1501277 郵便振替 00130-7-754314 (行)フェミックス

編集……稲邑恭子・中村泰子 装幀・イラスト……川口民子 印刷……(有)イー・エム・ヒー

●本誌掲載記事の無断転載、複製をお断りします。

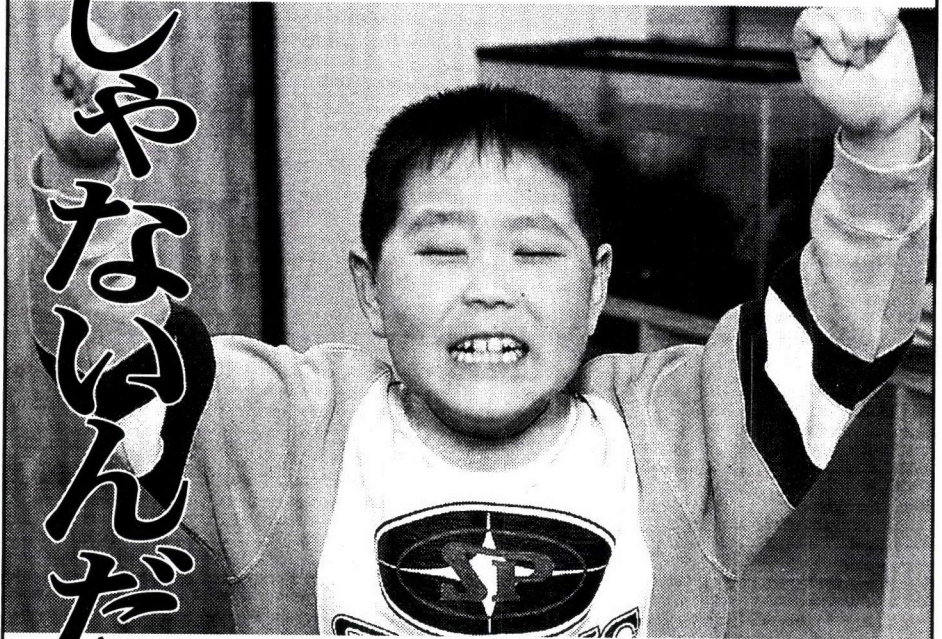
不登校新聞

<http://www.futoko.org>

Phone 03-5360-1231

月2回発行ブランケット版6P

理屈じやないんだよね



見本紙、無料送付します

全国不登校新聞社

購読ご希望の方は、編集部に直接お申し込み下さい。
電話、ファックス、E-mail、あるいは郵便振替で
○号から購読希望と明記して年間購読料7500円を
お振り込み下さい。

- 定価 680円 (本体価格648円+税)
- 年間購読料 7500円 (10冊/送料共)
- 郵便振替00130-7-754314フェミックス

「くらしと教育をつなぐWe」は、もともと家庭科の男女共修の実現のためにスタートした月刊誌ですが、従来の家庭科の枠を超えて、さまざまなテーマを取り上げています。

■2000年特集

4月号 違いとつきあう/5月号「国旗・国歌」考
6月号 ジェンダーの視点から「働くこと」を考える

■連載

女が歳をとるといふこと 木村栄◇家事神話—女性の貧困の
かげにあるもの 竹信三恵子◇書物逍遙/シネマの魔 武田
秀夫◇新米議員のジェンダー議事録 木村民子◇乱読大魔王
日記 冠野文◇ひげのおばさん 子育て日記 中畝常雄◇過
去を振り返らない/先を考えない 松本一郎◇ジェンダーフ
リー—大曼陀羅羅鑑 蔦森樹◇自己表現トレーニング 河村ふ
み◇終幕 水田宗子

■女と男の家庭科新時代

授業実践—家庭科・風がかわる 匂いがかわる
熊本発・困ったときの一発ネタ
かる〜い家庭科相談室
食の歳時記 入江一恵・坂本 薫
新・オホーツクの潮風荒く 江口凡太郎

◎バックナンバーも販売しています。バックナンバーの
リストをご希望の方はお問い合わせください。

■Weの置いてある書店■

- 北海道 ●旭川—こども富貴堂
東京 ●表参道—クレヨンハウス
●東京ウィメンズプラザ内—パッチワーク
●新宿2丁目—模索舎
●西荻窪—ナワ・ブラサード
大阪 ●ウィメンズブックストア松香堂
●江坂—クレヨンハウス
広島 ●家族社

(書店でご注文の場合は「地方小出版流通センター取扱い」とし
てお申し込み下さい。)

くらしと教育をつなぐWe 読者募集

フェミックス tel & fax 03・3424・3603

〒154-0001 東京都世田谷区池尻3-2-3サンケイグランドハイツ703

<http://www3.alpha-net.ne.jp/users/femix/>

E-mail femix@mail2.alpha-net.ne.jp